興安嶺を望む

此の處に立ちて東北の方を眺むれば、興安嶺の走り居る樣明かにして、克什克騰蒙古は興安嶺の西に在ること愈々明白となれり。余は此處にて寫眞一枚撮影せり。

支那人村落に一泊す

余等は尚ほ經棚に向つて歸らんとせるも、日漸く暮れんとしつゝあれば、如何ともする能はず、止む無く支那人の村落に入りて、一泊する事とせり。余等の宿泊せる家にては、溫床を焚き居りしかば、暖かに夢を結べり。

此の地の高さは九百六十米突なり。

經棚に歸る

十月一日。 朝風く宿を立出て經棚に向つて進む。十清里許りにしてトロオボギンコロ河畔に達せり。此の地にて支那人の耕し居れる畑の中に、東胡民族遺物の破片無數に散亂するを見たり。此處を過ぎ前日經過せる道を歸りて、遂に經棚に到着せり。

今後の旅館

余等は之より更に潢河上源地に出で、其より再び巴林方面に向はんとするなり。

此の日の溫度四十四度なりき。

經棚滯在

十月二日。 經棚に滯在。經棚の市街は全く潢河の上源地に位し、左右は屹立したる岩山にして、河水は兩山の間を流るゝ也。市街は其北岸にありて、東北方なる山は興安嶺の延長したるにて、此地の高さは八百四十米突なれば、潢河上源地の高さも亦推測するを得べし。

ペロホトン

此の地は元、克什克騰蒙古の土地にして、其の以前既に居住者ありしは、ペロホトンの名を以て、此地を呼び居るに見るも明なり。今は此處に城趾と思ぼしきもの見當らざれども、嘗て此の地に在りし城は、遼或は金時代のものならん。

物貨供給地

此町は此附近の支那人間の、需要を供給し居るのみならず、又た附近の蒙古人に對する、商賣をもなし居れり。目下潢河上源地に於て、支那人の中心たるは此の地なり。然れども經棚は新開の市街なれば、此に集まり居る支那人は、何れも寄り集まりの徒にして、無頼漢非常に多く、其結果人氣の非常に惡き處なり。

人氣非常に惡し

車、馬來らず

余等之より以後の旅行を爲すに、此地より車を雇はざる可からず。即ち衙門に其周旋を依頼せるに、人夫車共に出來たりとの事なりしが、愈々出發せんとするに當りては、同行せんとするもの無きの有樣なり。最初余等の衙門に依頼せるは、之より蒙古の地を經て赤峰へ歸る迄の車をとの申込なりしに、之に應じたる人夫も車も、途中より歸らんとするものなるを發見せしかば、嚴しく此事を衙門に談判する事とせる結果、遂に此日は出發するを得ず。空しく滯在する事となれり。又余等の之迄伴ひ來れる蒙古人は、余等の物品を奪ひて逃れんとする樣子あり。加ふるに余の娘は數日來の疲勞の爲か、下痢を起す等不愉快の中に一日を送れり。

不愉快なる一日

本日の溫度は、朝四十八度、晝六十九度、夜五十八度。

又も一日滯留す

十月三日。今日も談判の爲に出發するを得ず。本日の溫度は朝五十度、晝六十八度。

第十八　經棚より土城子潢河間

一、漢河上源地の旅行

漸く經棚を出發す

十月四日。漸く經棚を出發す。出發に臨み衙門と交渉し、隨行の車、人夫は蒙古地方を經て赤峰迄行く事を約束せり。衙門よりは又た蒙古語を解する支那人一人、小役人二人、兵士一人、車一臺を隨行せしむることとなり、午前十一時頃漸く出發し、先づ東方に向つて進む。

潢河支流の好風景

道は兩山の間を流るゝ河の北岸に沿ひて進む。此河は潢河の本流に注ぐものにして、潢河畔は比較的幅も廣く、支那人の村落處々に點在し、又畑もよく耕され居るを見る。又經棚の町を出づる處に、河に臨みて大なる廟あるを見たり。此は近頃建てられたるものにして、河流と此廟と調和して景色捨て難き趣あり。

峠に差しかゝる

この道を進む事四清里計り。初めて峠に差しかゝれり。此は興安嶺の南に走り居るものにして、余等は之を上る事となりたるが、麓より頂上迄は一清里計りもあり。全く禿山にして且つ急坂なるが、往昔よりの往來なるが如く、巴林、翁牛特、克什克騰へ行くには此處を通る事となり居れり。然れども道と云ふべき程の道も無く、全くザレ山を上るが如きものなり。されば到底馬車にては上るを得ず。余等は下車し。小兒は支那人に抱かしめ、喘ぎ〳〵徒歩にて上りしが、途中支那人蒙古人等の下り來るに會へり。次第に上り〳〵遂に頂上に達せしが。此處の高さは九百八十米突計りあり。即ち經棚より高さ百四十米突なり。峠の上に立ちて經棚の方を眺むれば、其の市街は全く谷間の凹地に在り。而して其他は總て山又山を見るのみ、以て興安嶺の走り居る狀態を知り得べし。即ち此附近は、明かに興安嶺の北より南に走り居る所にして、之より西すれば克什克騰、阿巴噶方面となり、之を東に下れば翁特牛、巴林等の蒙古なり。興安嶺の狀況を見るには此邊最も適當なるが如し。余は此處にて寫眞を撮影し、又た種々の調査をなしたる後ち、更に東方に向つて進み始む。然るに此の峠の上は、全く平地にしてさのみ下りの感もなし。即ち高原と稱す可きものにして、而も途中岩石の露出するもあり。全く山中を行くの思あらしめぬ。

興安嶺山中の狀況

峠の上を進む事暫くにして一村落に達す。こは蒙古人の村落にして、其の女子は固有の風な

支那化せる蒙古村

れども、男子は支那風にして、家屋の建築亦支那風なり。何れも農業を營み、今日しも粟の收穫をなし。非常に忙しげに立働けり。此地は平坦なる處にして、此處を中心として各所に通ずる路あり。

潢河の支流

余等は此村にて、此地方の蒙古人の狀態を調査したる後ち、尙も東南の間に向つて進めり。之より道は或は上り或は下りとなり居れるが、此間に於て九百二十米突計りの處最も高し。此の途中にて河の源に出てたるが、此は潢河本流に向ふものなり。此附近にも亦往時東胡民族の居住し居れりと見え、例の土器の破片、鐵鋒の小破片一個を拾ひしが、又た峠の上り口の處にても、素燒の土器の破片を得、東胡民族の此邊にも住ひし事を、愈々確めたり。

東胡の遺物

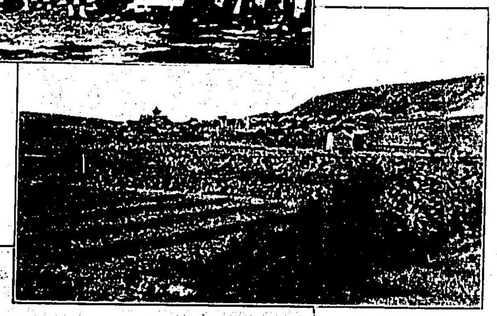
今日の道は全く山中なるが、既に地圖に於ても見る如く、興安嶺は西南に走る山なれば、余等は之を横斷せんとしつゝあるなり。斯く山間の道を進み、經棚より三十五清里にして、遂に大豪賴に到着せり。

大豪賴

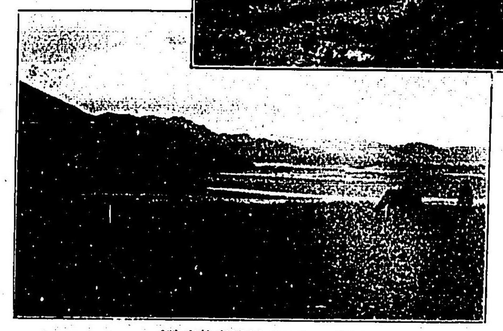
大豪賴は高さ七百四十米突計りの地に位し、峠の頂上より低き事二百二十米突計りなり。全く山中の村落にして、漢人の部落なれども、附近に蒙古人もあり、漢蒙人雜居の狀態にして、農業盛んなり。

シラムレンの上源地（九月廿四日）

土城子の朋人（十月十一日）



經棚附近



シラムレンの上源（克什克騰）

余等の入れるは此村の素封家なるが、役人既に余等の到着を報じありしかば、立派なる室に導き歓待大に努めたり。

余は曾てダライノールより、遥に東方に高き岩山を望みたりしが、之れ此の大豪賴の後方に聳ゆる岩山にして、好く西方諸地よりの目標となるものなり。

本日の溫度は朝六十三度、晝六十七度、夜六十度なり。

十月五日。 早朝大豪賴を出發す。宿の主人は今日の道、頗る惡しく困難なりと語りしかば、之迄二頭の馬に車を牽かしめしを、更に一頭を增せり。

主として道を東方にとりて進む。此間凡て山にして、村落も無く又た耕されたる畑も無し。二十清里計りにして、初めて潢河の本流に近づく、左右は山にして河水は其間を流る。此處も亦人家一軒も無く頗る淋しき處なり。

興安嶺の狼群

潢河に會す

余等は更に東方に向つて行を續けつゝありしに、突然十疋計りの狼の群に會せり。其形痩犬の如くなりしが、之れ興安嶺に棲むものなり。若し一人二人の小人數ならば、彼等は直ちに余等に向ふべきなれども、馬、車、人夫等余等の一行は大勢なれば、却つて狼の方にて恐れ、余等の姿を見るや否や、彼方の山に向つて走り去れり。余等は彼等のせん樣を見んと立ち

停りて之を注視し居りしに、山の小高き處に悉く匿れたるも、其中の一疋は尙ほ止まりて余等の方を凝視しつゝあり。蓋し張番を爲し居るものならん。此の時尙ほ狼と余等との距離左迄遠からず。能く其相貌等を見るを得たりしが、即ち耳立ち、口尖り、肉痩せて恐ろしき狀貌なり。興安嶺山中に狼の多きは什て耳にし、又た其毛皮は蓋に西烏珠穆沁に於て採集せし事ありしが、今日しも其實際を確むるを得たり。彼等は潢河に水を飲まんとて出て來れるものゝ如くなるが、既に斯る往來に出沒するに見れば、將來此地方を旅行する人は注意すべきなり。

橋頭營子

石橋建設の碑文

余等は更に潢河の流域を其の北岸に沿ひて進む。此附近にては潢河の流も未だ清くして、水勢亦穩なり。二十清里計りにして橋頭營子に達す。此地昔は石橋ありしと思はるゝも、今は其の土臺殘るのみにて橋は全く壞れ居れり。又た橋の側に一の廟あり、其中に三つ計りの碑石を存し、其に橋を建設せる由來を書せり。即ち之によれば、此橋は乾隆三十二年に架したるが、後壞れたれば同四十七年、之を重修したるに又破損せしかば、道光二十三年更に重修せりと書せり。其以後の碑なければ、以後は修繕を加へざるものと見えたり。

此附近は支那人の村落のみにして、全く蒙古人を見ざるも、既に乾隆三十二年に斯く立派なる橋を架せるに見れば、其前後より支那人の侵入し居れるを證す可し。

潢河上流の架橋

彼の東翁牛特と巴林との間、ホーロクヌハシラガには、遼時代既に石橋を架して、潢水石橋と稱し、契丹の上京に通ふ道に當り、今尙ほ其の一部には橋を架し居れるは、前に述べたる處の如し。余は潢河上流に架せるは、此潢水石橋のみならんと思ひ居りしに、尙ほ其上流に當りて、乾隆年間既に橋を架し居るを發見せり。即ち潢河には二百年前既に橋梁ありしなり。而も此附近は流も急ならず、且つ河幅も狹ければ、架橋には最も便利なる處と思はる。

余等は碑文によりて、橋の調査をなしたる後ち、車を水中に乘り入れて、之を渡る事とせり。然るに此頃は水量少ければ、渡るに困難も覺えざりき。河を渡りてより少時にして、橋頭營子の村落に達せり。此處には不完全ながらも、支那人の旅店ありしかば、余等は其家に入れり。時に午後一時頃なりき。此家は宿屋と云ふも名のみにて、御馳走も無く只茶を喫みし位なり。

此處より潢河の方を眺むれば、河水眼前に流れ景色絶佳なるを以て、余等は寫眞を撮影せり。此の地の高さ六百八十米突なり。

余等は休憩食事を取れる後ち、馬を代へて旅行を續く、潢河の南岸に沿ひ。東北方に向つ

て進みしが、道は全く谷間を行くの思ひあり。途中憐れる村落を一つ經過せるのみ。目に見るものは只山、水、岩等なり。大なる樹木も無く、只草の生ゆるのみ。昨日より今日の道にかけては、人家の附近には、少し許りの樹木あれども、他は凡て禿山なり。之によりて潢河上源地の樹木は、既に伐り盡され居るを知らん。十七八清里にして、河の流れ漸く廣くなり來れり。此處は潢河の本流に、白岔溝の注ぐ處にして、其の眞中に白岔營子と稱する村落あり。此附近は地味宜きもの丶如く畑も耕され居り、地勢廣濶にして、川を隔て丶對岸に煉瓦作りの殿堂を望み、打ち開けたる光景を呈にり。

潢河上源地の樹林伐盡さる

白岔營子

余等即ち白岔營子の村に入りしが、此處は全く支那人のみの村落なり。余等は役人の案内にて一軒の家に到りしに、其家の主人は、如何にするも余等の宿泊を肯ぜず。經棚の役人も其强情に彌々持て餘せし樣なりしが、余等は大に彼を叱し、車を入れしめ無理にも一泊する事とせしに、少時して主人も打釋け、余等の爲めに食事其他の用意をなせり。

村人の薄情余等の宿泊を拒む

此の日の行程四十清里餘、全く潢河の本流に沿ひて來れるなり。白岔營子の高さは六百米突にして、即ち余等の中食せる處と大差なし、此邊にて潢河も餘り高低なく、水の流も穩なり。

潢河の流穩なり

支那人の語る所に據れば、此の村に近く、石獅子、瓦等の多數散亂する處ありしかば、余等は其を調査せんと欲せしも、一行之に應ぜざりしかば、止むを得ず。之より土城子にて出て、後ち再び其地を調査する事となせり。

白岔溝と潢河との合流點

此村は白岔溝と潢河との合流地なれば、地形最も面白く、古くより住む者ありたるが如し。余等は村の入口にて石斧及び大觀通寶一個を拾ひたるが、石斧によりて東胡民族の居住せしを知る可く、又大觀通寶あれば、其時代既に住む者ありしを推知し得ん。

東胡及び唐朝の遺物

本日の溫度は朝五十八度、晝六十八度、夜六十六度なり。

二、土城子に於ける奇禍

十月六日。早朝出發す。今日の道はマンハにして、馬の進み非常に困難なればとて、三頭の馬に車を牽かせ、暫らくの間東方に向ひて、マンハの丘陵を進み行きしに、途中人家は一も無し。十五清里計りにしてマンハ全く盡き、此處には又た人家多く立派なる村落を爲せり。此村をバリッンと稱し住民盡く農を業とし、今しも粟の收穫時なれば非常に忙しき有樣なり。

余等は此村を過ぎて更に行を續く。マンハ既に盡きたれば、馬を二頭に減じて車を行る。此

土城子

赤峰と土城子經棚との關係

附近に到りては、土地少しく廣くなり來れり。亦東方に進む事更に十五清里計り、初めて土城子に達せり。

土城子は此附近支那人の中心地にして、彼等に物貨を供給し居れり。市街は山と山との間に位し、周圍には土壁を廻らし、人家四五百計り軒を並べ、普通の財貨は殆んど其の店舗にあり、宿屋の如きも數軒あり。又た經棚の分れなる一小衙門もあり。警部位の役人之に駐在し、比較的殷盛なる町なり。

此町よりは烏丹城を經ずして、直接赤峰へ行く可き道あり。此處より赤峯迄は二日行程にして、即ち土城子、三家子間四十清里、マーチャーズ五十清里、大リヤンチ四十清里、トンオボ四十清里、シンルンツアン三十清里、赤峯二十清里なり。物貨の如きは凡て赤峰のものにして、經棚亦然り。即ち經棚及び土城子は、潢河流域に位する爲め、ドロンノールとは關係せず。赤峰と商業上の取引をなし居るなり。而も其の管轄はドロンノールに屬す。ドロンノールも商業盛なれど、粟、豆、稗等の穀類は、總て赤峰の相場によりて決せらるゝ有樣なり。之等に見るも、赤峰の如何に此地方の商業上に、重きを爲すかを知る可し。

此地を土城子と稱するは、此附近に古き土城のあるに起因するならん。而して此の城壁は恐らくは、遼時代のものなるべし。今は此地を土城子と名け居れるも、往時は黑石灘と稱するが如し。如何となれば、現今此の土城子の町に存する廟に懸り居れる鐘の銘を見るに左の文字あり。

往時の黑石灘

道光三年七月十五日成立黑石灘九神廟聚金鐘一個修合得街人等

之によりて考ふるに、道光年間には、黑石灘と稱し居りたる事明かにして、此の地は其以前既に開け居れるも明かなり。此は昨日見たる石橋の碑文と共に、何れの時代より、支那人は潢河源地に侵入し、又た如何なる生活を營み居れるかを、知るべき史料として、最も價値あるものなり。今や此町には蒙古人の住むもの無し。此地の高さ七百二十米突。

支那人の亂暴

余等の此町に到着せるは、午後一時頃にして、直ちに宿屋に入れり。此の宿屋も亦回教信者にして、一切豚を用ゐず。余等の宿屋に入るや住民珍らしがり、余等を見物せんとて無數に集まり來れり。其の中の一人の男の如きは牆を踰えて侵入し、余等の部屋を窺はんとする樣子なりしかば、余は大に彼の不都合を詰問せるも、尙ほ立去らんとせざれば、余は彼を立去らしめんとせしに、亂暴にも彼は余に抵抗し、余の右の中指を折れり。余即ち其の不都合を責め、經棚より伴ひ來れる役人に、彼を捕縛せよと命ぜしに、役人等は却て彼を保護して逃げ去

衙門の不都合

らしめぬ。茲に於て余は之を衙門に訴へたるに、衙門は外國人の談判を非常に恐れ。門を閉ぢて應ぜず。手續書を取らんとせしに之亦應ぜず。故に余は若し暴人を逮捕し來らずば、我が公使を經て北京政府に談判せんと談ぜしに、彼等は非常に恐れ、急に護衛として二名の兵士を、余等の宿舍に附くる事とせり。

兵士の滑稽なる武器

此の護衛兵士等は、互に異なれる舊式の火繩銃と、若干彈丸を所持するのみ、之に依りて見れば、此邊の巡査は銃を有せざる事明かなり。されば萬一土匪にても蜂起せんか、如何にして其を防ぐ可きかは疑問にして、却て土匪に其土地を奪はるゝ虞なしとせず。寧ろ滑稽に類すると云ふ可し。

別人を捕縛し來る

彼等は余に謂て曰く、亂暴人は何地に逃れ去れるか分らねど、二三十人の兵士を其の捕逮に向はしめたれば、嘗て何等かの報告來らんとの事なりし。然るに其夕暮頃、役人は其亂暴人を捕縛せりとて、一人の男を鎖にて縛り、余の前に連れ來れり。而も之れ全く別人なりしかば、余は地方官吏に向ひ、大に其不都合なるを詰問せり。斯かる談判にて遂に一日を費せり。

此の日の溫度は朝六十三度、晝七十三度なり。

衙門との交渉に數日滯留す

十月七日。余は車を催促せしも應ぜず。又た亂暴人を捕へ來りて謝罪せよと、地方官に命じたるに之も果さず。手續書は書き來れるも要領を得ざるものなりしかば、今日も斯くして空しく送れり。

經棚馬夫の不埒

本日の溫度は朝五十二度、晝七十七度。

衙門との交渉要領を得ず

十月八日。余等の經棚にて雇ひたる馬車は、赤峰迄行く約束にて相當の手附金をも渡し、其の受領書をも取り居れるに、彼等は此處に余等を置きて歸らんと企て、人夫等は不都合にも金子を得て歸らんと言ひ出せしかば、余等は未だ目的地に達せぬに、賃金を支拂ふ可き理由無しと答へたるに、彼等は金子を得ねば歸らずと主張せり。即ち余等は此處の衙門に馬車を命じたるに、馬は出來たれども手續書は未だ送り來らず、容易に埒明くべくも無し。余等は寸時も早く目的地に向はんと、氣のみは焦せれども亦如何ともする能はず。此處の衙門にては到底解決の付き難きを知り、經棚より隨行し來れる護衛兵に命じ、北京公使館に送るべき書狀を、赤峰の尚大人に依頼して送らんと、赤峯迄行かしむる事とせり。彼は明朝早く此地を出發する事となれるが、二日目には日尚ほ高き頃赤峰に達せんと云ひ居れり。

北京公使館に書面を送る

此の書狀は、余等は亂暴者に會へるも、地方廳は何等の處置をも爲さゞるを以て、直接北京

衙門の謝罪

外務衙門に談判せん事を依頼せるものなり。然るに此の話町に廣まりしより、役人は非常に恐れ、余等の前に來りて大に謝罪し、書面の發送は見合し呉れよと頻りに懇請せり。斯くて又た一日を暮せり。

衙門の手紙書要領を得ず

本日の溫度は朝五十三度、晝六十三度、夜六十度なり。

十月九日。 朝經棚の兵は赤峰に向つて出發せり。此朝復た衙門より手續書を認め來りしが、自己に有利なる事のみ書き列ね居るを以て、余は之を返附せり。此の夕衙門より使來りて曰く、當衙門は小さき役所なれば衙門の印も無し、又た亂暴人は既に捕へ居るを以て、大人の思ふが儘に打擲せられよ。然らば手續書は不必要と思はるゝが如何に、又た衙門には字を書く者無く、只一人文字を書き得る先生は、回々廟に念經中なれば、今夜は到底書くを得ざるべしとの事に、又もや要領を得ずして日を送れり。余の此の間に種々の取調物を爲せり。

役人の怠慢

本日の溫度は、朝六十三度、晝七十度。

十月十日。 今日も遂に手續書を認め來らざれば、余等は明日直接衙門に出頭して、手續書を出すや否やを確めたる上出發せんと、其旨豫め衙門へ通知せしに、使歸り來りて云はく、今夜は町に影絵の芝居ありて、役所は悉く不在なれば、氣の毒ながら今夜一日延期し呉れよとの事なりしかば、又々滯在する事となれり。

罪人を引き來る

本日の溫度は晝六十四度、夜六十度。

十月十一日。 漸く衙門より手續書を認め來れるも、衙門の印を捺し來らず。止むを得ず役人の拇指に墨を附けて之に捺さしむ。罪人をば首枷手枷を篏め、大勢にて余の前に引き連れ來れり。余は斯る光景を見る機會の、再び無かる可きを思ひ、役人等全部と共に之を寫眞に撮

首枷手枷の珍光景

影せるに、經棚の役人は一人止まれるのみ、他は何れも逃れ去れり。此地の役人余に向ひ、此の罪人は打つとも殺すとも、大人の處罰に委す。然れども彼には一人の老母あり、願はくば大人の惠により、其罪を赦し給へと頻りに請ひしかば、余は罪人を罰するは御身地方官の職責なれば、余等は敢て關せずと答へて取合はず。且つ將來外國人の旅行し來る際にも、よく〳〵注意せざるべからずと、地方官並びに罪人に懇々說き聞かせぬ。

役人及び亂暴者を說諭す

經棚の馬夫酒代を强請す

此の日經棚より隨ひ來れる從者等は、金子の所持一文も無ければ、宿賃を支拂ひ呉れよと申出てたり。然るに彼には四人隨行する筈なりしに、急に人員二人を增し六人分の勘定なりしかば、余は其不都合を詰り彼等の面を見しに、其中の一人は全く見も知らぬ男なりき。之等の無賴漢相集まりては、宿屋にて暴飲暴食をなし、其代金を余等に支拂はしめんとせるな

金子を與へて馬夫等を解雇す

り。而も余等は經棚を出る時、既に手當金を與へ居るに、今又斯る不當の請求を爲すは、不部合なりとは思ひしも、余等は今旅行者の身にして、僅に金五兩の金子（日本の七圓五十錢）とて之を與へたるに、彼等は之を受取るや否や、大人を乘せ來れる車は、既に破損して用を爲さねば、之より先の隨行を止め呉れよと請へり。余亦其不都合なるを知るも、彼等の關係を絶たんが爲め其請を容れ又。

騎馬旅行に決心す

赤峰に使せる兵士を待ちて數日を空しく暮す

爰に於て余等は、此地より新に車を雇はざる可からざるに到れり。然るに此の町には車無しとの事なりしかば、止むを得ず。余等夫婦共騎馬にて旅行を續くる事とせり。之を聞きたる地方官吏は非常に心配し、騎馬にて行くの頗る困難なるを說き、曩に赤峰へ使せる兵士も最早や歸り來る可く、其際には車を持ち來るべければ、其れ迄待たれよと言ひしも、赤峰へ行ける兵士も、今迄待ちて來らざるに見れば、果して歸り來るや否やも怪しければ、余等は愈々騎馬旅行の決心せり。

本日の溫度は朝五十三度、晝六十一度、夜六十二度。

十月十二日。 終日兵士の歸り來るを待ち暮せり。

本日の溫度は朝五十六度、晝六十三度、夜六十三度。

九神廟の石獅子

十月十三日。 今日も亦兵士の歸り來るを待ちて、一日空しく滯在せり。

本日の溫度朝五十三度、夜六十六度。

余等は斯く數日間空しく土城子に滯在せるが、其結果此の附近の支那人の、人氣非常に惡しきと、旅行者の決して油斷すべからざるを知り得たり。此は將來此の地方を旅行する人の最も注意すべき點なり。又た此の滯在中に利益せるは、此邊の地形を知り得たると、土城子の町の九神廟に於て、小さき石獅子を得たる事之なり。

此の石獅子は一對あるべき筈なれども、其の一は失せて一個より無かりき。余等の九神廟に到れる時、此の石獅子は只廟の中に轉がり居りしが、如何に見るも頗る好き出來にして、其の格好と言ひ大きさと言ひ、余は非常に氣に入りたれば、飽かず之を眺め居りしに、同行の官吏は余の怒を釋かんとてか、之を余に贈らんと言ひしかば、余は之を幸ひとし、余一己の娯しみとするに非ずして、學術上の參考に供する爲めなるを說き、彼に若干の銀子を與へて之を受けたり。

彼人余に石獅子を贈る

土城子當年の繁榮を偲ぶ

此は土中より掘り出せるものゝ如く、遼時代關係のものならん。全く一個の美術品として も面白きものなり。之によりて考ふるに、當時此の地方の進步し居れる事想像に難からず。

愈々騎馬にて土城子を出發す

經棚の馬夫復び同行を乞ふ

却て今日は當時に比し、甚だ盛ならざるを思はしむ。此の地に關しては、聊か考ふる所あれども之を略し、只此一事を述ぶるに止めん。

十月十四日。 余等は愈々騎馬にて旅行を續けんと、馬を連れ來れと地方官に命じたるに、二頭の馬を牽き來りしかば、余は其一に騎し、余の妻は幸子を抱きて他の一に乘り、馬夫二人兵士二人を隨へて、直ちに出發せしに、道路觀者堵の如かりき。然るに此の時經棚より隨ひ來れる役人の或者余の前に來り、此處より歸らば主人に叱責されんとて、隨行を請ひしも、余等は昨日既に暇を出し居ればとて之を許さず。斯して土城子の門を出て、北に向つて進めり。

土城子の繁榮と河流との關係

土城子附近に一河あり。土城子の今日の隆盛を爲せるは、此河の影響與つて大なるものなるが、河には水量亦多かりき。門を出れば一帶の光景浩々たる平地にして、周圍は山を以て圍まる、而して此平地はよく耕され居れり。五清里計りにして一の廟に達す。此は老爺廟にして構造頗る立派なり。

老爺廟附近の壞敗せる土城の趾

此附近に又た朧げながら土壁の趾を見る。既に破損して其全形を認むる能はざれども、昔日にありては、大なる城壁なりしならん。今は斯く壞敗せりと雖、當年の盛なりし樣偲ぶべく、川に接して地廣く。眞に好地勢にて、土城子の名も恐らくは、此に起れるものなるべし。而して此の城は、遼時代のものたる事明かにして、余等の先に得たる石獅子は、此邊より出たるものならんと考へらる。潢河流域に於ける契丹を研究せんには、此城の如き最も注意すべきものならん。

城の調査を終り更に旅行を續けたるが、暫らくにして山路に差し掛れり。此の地はドロンノールと赤峰との管轄の分るゝ處にして、蒙古としては巴林、克什克騰、東翁牛特間の岐點たり。此の土城の存する山の麓に、一軒の人家ある外、尚ほ赤峰の役所の出張所一軒あり。此地に入るや、土城子より隨行し來れる兵士は大に色を失せるが、其は此の地は既に彼等の管轄を離れ、且つ余等は赤峰の武官尚氏と親交あるに恐れてなり。而も余等は前途を急ぐ事なれば、此處の役所には立寄らず、直ちに山路を上り初めぬ。山には樹木無く全く禿山なり。余等は馬に乘りたる儘、山を上りたるが、途中一二人の人に會へるのみ。廟のありし處より十清里計りにして、頂上に達せしが、高さ七百八十米突計りなり。

赤峰の管轄に入る

山路を登る

頂上よりは更に少しく東に偏せる北方に向つて下り初め、十五清里計りにして初めて低地に出づ、山を降れる處にて東胡の土器を拾へり。此處迄は人家一も無かりしが、此邊よりは

小河子

人家もあり。又た畑も耕され居れり。彼方此方に點在する村落を過ぎ、小さき城の趾を經て、畑中の平地を進む事十清里計り、夕暮頃初めて小河子に到着せり。此地の高さは五百米突にして、即ち山頂より二百八十米突計り降り來れるなり。

此の村は多少富裕にして人家も多し、余等の泊れるは村中の豪農なりしが、大に余等を待遇し、土城子より隨行し來れる二人の兵士も亦、余等の爲に非常に立ち働けり。

本日の溫度は朝五十五度、晝七十四度、夜六十八度なり。

第十九　潢水石橋より大板身

一、潢水石橋を渡る

東翁牛特領

潢河を渡て巴林を望む

十月十五日。此處迄余等は騎馬にて旅行し來れるが、此の家の主人は車を所持するとの事なりしかば、之に乘りて出發する事とせり。

午前八時頃小河子の宿を出發し、潢河本流の南岸に沿ひて進む。道は再びマンハとなり歩行頗る困難なり。此邊の土地は既に東翁牛特にして、余等は本年三四月頃此地を旅行せる部等、坐ろに追想せり。此邊潢河の北岸は既に巴林なれば、其山岳丘陵等手に取る如く見ゆ。

東胡民族住居の跡

銅製の指輪

潢河對岸の荒野

途中マンハの道に當りて、恰かも土地を叩き固めたる如く、黑色を呈して固まり居る處所々に在り。而して之等の處には、東胡の土器石器等の破片散亂し居れり。此は元東胡民族の住居せる跡にして、當時飼養せる牛馬羊の糞等附着したる上を人の往來せる爲め、斯くの如く固まれるものならん。而して斯る處に注意すれば、必ず何等かの遺物を發見するを常とし、此處にても亦、余は彼方此方を注意せしに、砂の中より黑く光る物の頭部丈け出て居るを認め、何心無く拔き取りたるに、銅製の指輪なりき。模樣も何もなけれども、綠色のガラス玉を嵌め込みたるものなり。其他動物の骨片の散亂し居るを見たるが、其中には鐵の破片も雜り居れり。之等に見るも此の場所の、東胡民族住居の跡なる事明なり。就中最も注意すべきは指輪を存するの一事なり。勿論漢民族より入りしものたるは明かなれども、以て東方亞細亞の指輪を用ゐし事を知る可く、指輪の歴史として、東胡民族の間に存するものゝ中、最も古き材料の一たるを失はず。

余は此外種々の取調をなせしが、潢河の南岸たる此の附近は、マンハの丘陵にして、非常に憐むべき荒漠たる地なれども、對岸巴林は多少勝れり。即ち巴林の地を一名ハラモトと稱す。此村樹木の鬱蒼たるの意味にして、ハラは黑、モトは木なれば即ち森林と云ふが如き意味な

ベンチョン城跡

牛歳の望を逐し巴林橋を渡る

り。之を以て見れば、即ち森林といふが如き意味なり。今日は此附近に樹木無けれども、往時は森林鬱蒼たりしを思はしむ。

斯くして取調をなしつゝ、進むとも無く二十清里計り進み、漸くにして巴林橋に達せり。蒙古人の所謂、ホーロクスハシラガの前岸に出でたる也。此邊の高さは四百六十米突なり。

隨行の馬夫の言に據れば、此の南岸にベンチョンと稱する古城址あり。此の地はマンハなれば其形は充分明かならざるも、昔より語り傳ふとの事なりしかば、余等も注意して之を調べたるに、土壁の二重になり居る樣幽かに認めらる。之によりて巴林橋附近に城のありし事を考へ得たり。

此の地は既に三月三十一日の條にも述べたるが、當時余等は東翁牛特より、此橋を渡りて巴林に入らんとせしも、水急にして渡るを得ざりしなり。其より半年、今日再び此の橋畔に立てば。河水非常に少く、水は處々に少しく殘り居る位にて、殆んど平地を行くが如し。當時を想起せば、全く不思議なる位なるが、其時は氷の解けたる計りの際なるに、今は最も水量少き時なれば、而白き現象を呈せるなり。

暫らくは水の少しく浸せる砂地を歩み、以前の記事に於ても述べたる、河中の中島に上れ

り。此處は岩石の顯れ居れる所にしてオボもあり。此の中島と北岸との間には、欄干を有する石橋を架し、其傍に碑文を建つ。之には漢蒙兩文にて

咸豐六年歳次丙辰中秋月

と記し居れり。

石橋の架せられ居る方は水多し。即ち潢河は其北岸の方は水常に流るるも、南岸は干潟になり居れるなり。此事實より考ふれば、此處の位地は前にも說ける如く、明かに遼の潢水石橋なり。當時も此の中島を利用して、北岸に石橋を架し居れる事は、明かなる事實にして、其は北岸に處々礎の跡を存するに見るも推知すべく、南岸の方には橋ありしや否やは疑問なり。而して此の中島と兩岸との距離を見るに、南岸の方は北岸の方に比して幅最も廣し。然れども南岸亦石を積みたる跡を存するを以て、此の方面にも橋を架し居れるものか否かは明かならず、尙將來の研究を待つべきなり。兎に角遼時代の里程を研究するには、必ず此石橋を基礎とせざるべからざるなり。

石橋の前に古き六角の碑石あり、文字は磨滅して充分見えざれども、緣の處に輪廓ありて其に唐草摸樣を彫刻し居れり、而して其上部に記せる

の三字は幽かに讀むむを得べし。其の何れの時代に屬するかは明かならざれども、明以前のものたるは疑を容れず。

巴林に入る

此處にて種々の調査を爲したる後ち、午後二時頃余等は橋を渡れるに、其附近に二つの天幕あり。其一は巴林王より派遣せられ居る橋の番人にして、兵士二人之に居れり。他は通常の蒙古人なるが如し。余等は之より愈々、巴林の土地を歩む事となれるなり。余等は此處にて土城子の兵士及び小河子の馬車等をも歸し、之れよりは全く蒙古人と共に、旅行する事となれり。余等は其の一軒の天幕に入り、蒙古語のみにて談話を交へぬ。久振にて蒙古人と直接に話すを得て愉快なりき。巴林に入りてよりは、人情質朴なれば旅行も安心なり。

久振にて蒙古人の質朴に接す

此の時、鐵砲鍛冶の如き男二人居り、頻に鐵砲の修復を爲し居りしが、其中の一人は見覺えある顏なれば。よく〳〵注視せるに、今春潢河を渡りし時、余の娘を抱ける喇嘛僧なり。殆んど半年振りにて再會せる事とて、共に其の無事を祝し合へり。彼は余の娘を指し、此の人々は知人なりと其仲間に語り、今昔の感に堪へざるもの〻如かりき、蓋し旅路にありて、知人と會するは尤愉快なるもの〻一なり。

碧知の喇嘛僧と會す

蒙古人の銃獵

鐵砲鍛冶

此の頃は潢河の流域に雁多ければ、巴林の蒙古人にて獵を生業とするものは、草蔭に身を潛めて之を打ち取る。而して支那人に賣るなり。彼等の用ふるは皆火繩銃なるも、鐵砲を作る事は無論出來ず。此の喇嘛僧は翁牛特の男なるが、鐵砲鍛冶として、處々を廻るを生業とするもの〻如し。

余等は此處を出發せんとするに、此地には車無きを以て、對岸東翁牛特より雇はざるべからず。即ち蒙古人を遣はして之を周旋せしめたるに、彼は歸り來りて馬車を雇入れたりとの事なりしかば、安心して其夜は色々の話に打興じぬ。

本日の溫度は朝五十五度、晝七十四度、夜六十八度。

二、大板身に入る

十月十六日。 潢水石橋の架せられたる所の高さは四百六十米突なるが、此の事實は遼史及び契丹を研究する人の、最も考ふべき點なり。

余等は愈々巴林の地を旅行する事となれり。三川の旅行の際には此處を渡り得ざりしかば、此より尚ほ東の方を渡りて、巴林の旅行を繼續せしが、今回は幸にして潢水石橋を渡るを

得たれば、之より大板身に向つて進む事とせり。昨日約束せる馬車も來りしかば、道案内として、巴林の兵士一名を伴ひて此處を出發せり。

暫らくの間は河岸のマンハの道を進みしが、轉て岩山の丘を傳ふ事となれり。山中の道を西に向ひて歩む事三清里計り、此間全く人家無く處々に樹木あるのみ、而して此の樹木は多くは柏、杏等なり。余等の經驗によれば、杏は多く五六百米突位の高地に在るが如し。

柏、杏の林

此の山は岩石露出し、興安嶺山脈の中なる事明かに認めらる。而して此の山中の最高所にて七百米突なりき。山上より眺むれば、之迄經過し來れる、潢河及び東翁牛特の山々も望み得らる。又た此の最高處にはオボあり。余等は此處に小憩して、寫眞を撮影したる後之を下り、初めてチヤガンムレンの流域に出づ。更に下る事少時漸く平地となれり。前方喇嘛廟及び蒙古人の村落を望みつゝ進み、午後四時頃チヤガンムレンを渡り、潢水石橋を距る事八十清里計りにして、大板身に達せり。此地の高さは七百四十米突なり。

チヤガンムレン流域に出づ

チヤガンムレンを渡る

大板身に入る

大板身に就ては四月九日記事に述べたるも、當時は單に東方より此地を眺めたるのみなり。此處には有名なる喇嘛廟あり、僧侶の數も非常に多し。而して此の地はチヤガンムレンの流域に位し。地廣く且つ富裕なれば、喇嘛廟の設けらるゝも亦宜なり。又た喇嘛廟の用達をする商人、役人等の家も多くして、殷賑なる町なり。余等は北京の大商人の出店に入りて、一泊する事とせしが、久し振にて支那料理の御馳走を味ひ、種々談話に其の日を暮せり。

久し振にて支那料理を味ふ

大板身の遺跡

大板は當に現今のみならず、往時より既に盛なりしと思はる。即ち蒙古人の稱するクキルノトカには土塀の趾、陶器の破片を存する等、昔時人の住へるを證す。而して之等は遼、金頃の遺跡なり。チヤガンムレンの流域に住民ありしは、之迄の遺跡物によりて、既に明からなるも、今此の遺跡に見て愈々確むるを得たり。

支那化せる大板身の古人

本日の溫度は朝五十八度、晝七十七度。

十月十七日。 昨日の車は即夜を乞ひて歸りしかは、新に車を雇はんと此地の役人に談ぜしに、彼は直ちに承諾せるも車は容易に來らず、十一時頃に到りて漸く來りしかば、其より出發せり。

本日余等に隨行せる馬夫は、兵士にして賢き男なり、彼は又た支那語をも解し非常に役立てり。大板には支那人多く居住するを以て、此の地の蒙古人等も支那人に接する結果、多少支那語を解せる樣になり、又性質も其感化を受けて狡猾になり居れるが、此の隨行の馬夫の如きも之なり。彼等は非常に金錢を愛し、金さへ與ふれば、如何なる事をも厭はざる風なり。

巴林人中にても此の大板牙の蒙古人の、狡猾なるは斷言するに憚らず。元來此の大板牙は、巴林の蒙古なれども、其管轄は此地に居る小なる貝子に屬するなり。

午前十一時余等は車に乘りて發出し、馬に鞭ちて一目散に驅けしめぬ。此の途中には樹木も無く、道は又た凹凸無ければ、馬を驅るには最も便利なり。此の道は斯の如く單純記する事も無けれど、往時遼時代には、巴林橋より遼の上京に通せしものに非ずやと思はる。余等は斯る道を東方に向ひて進み、ドントスアイヲ、ロタバイシン等の村落を通過し、夕暮頃チヤガンウスに到着せり。

巴々たる遼の上京道

チヤガンウス村

此處も赤蒙古人の村落なり。之迄の例に依れば、余等の其村落に入るを見るや否や、蒙古人等は馬に乘りて逃れ去るを常とせしが、此處にては斯る事無かりき。余等は村内の富家に車を入れたるに、其家の主人は歡待大に努め、羊を屠りて饗應せり。余等は久振にて蒙古人の親切に接し、特に愉快を感じたれば爰に一言す。

蒙古人の親切

此の日の溫度は朝五十七度、晝七十四度、夜五十四度。

第二十　小巴林より阿嚕科爾沁

一、小巴林王府附近

十月十八日。早朝車に乘りて此村を出發し、暫らくにして河流に達せり。此の流は既に四月の旅行の時に述べたる、彼の小巴林王府の前を流るゝものなり。余等は之を渡りて暫らく進み、小巴林王府の前に出でたり。之よりは四月の旅行の際、歩めると同じ道を辿る事となれり。この間一峠ありてオドあり。高さ五百八十米突なり。此の道に就ては前既に述べたれば今は之を略す。斯て正午十二時頃、オッソイフと稱する一村落に到着せり。此は曾て余等の一泊せる處なるが。今回は單に休憩して茶を喫めり。村人中幸子を知れるものも居れり。村の高さは五百米突なり。

小巴林王府前路を辿る

オッソイフ

今日余等の通過し來れる山中、オボのありし高處は分水嶺を爲し、バインコロ之より流れ出づるものにして、此の村落は其の流域に位するなり。

バインコロ流域

余等は暫らく此處に休息せる後ち、再び車に乘り、主としてバインコロの流域を東北の間に向つて進みしが、此の道は前日の道の、直接遼の上京に通ずるものなるに反し、同じく上京に

遼の上京道

通する道ながら間道なり。道は全く山の間にして岩石出づ、遼の上京は左方にある筈なれども、山に遮られて見えず。又右方の山には、トーギンソムと稱する喇嘛廟あり。山と廟と調和して景色佳なり。又た五百五十米突計りの處には杏の木多し。道の無き處を彼方に蜒り此方に蜒りて進む事なれば、車を行るに困難なりしが、夕暮頃漸く平地に達せり。

ウルヂムレン流域

此邊は一帶の平原なるが、是れ遼の上京より流るゝウルヂムレンの流域なればなり。此處に又た大なる土城の趾あり。周回四清里、城壁は頽れ居るも、其の西北部のみは完全に存し居るを以て、之によりて調査せるに城壁の高さ五尺あり。入口の門は西北方にありたるものゝ如く、其他は分明ならず。又其の近傍に、土にて作れる大なる高臺の趾を存するあり。此は昔建物のありし處なるべく、其の周圍には色を着けたる瓦、其他種々のものゝ散亂するを見たり。

土城

城趾の遺物

蒙古人は此處より古錢を多く出すと語れり。

城は三方に山を負ひ、只其前面のみ打ち開ける平原に臨めり。城より現今のウルヂムレンの水流迄は、五清里計りもあるべし。而して此の土城の形式は、遼の上京と同一にして且つ其の附近にあるに考ふれば、其同時代のものたるや明かなり。又た此の城中に駒止めの石四五を存せり。余は春の旅行に、此の附近にて多くの古錢を採集せしが、恐らくは此の城中より得たるものならん。

土城の形式遼の上京に同じ

ウルヂムレン

余等は古城の調査を了へて再び旅行を續け、ウルヂムレンの方に向ひて進みしに、天幕を張れる蒙古人の村落に達せり。然るに村人は悉く他へ去り、宿泊すべき家も無く大に困却せしが、余の馬夫は遂に一軒の家を見出し來れるを以て、余等は直ちに其家に入りて一泊する事とせり。

村人逃去りて宿るに家無し

今日の道は全く遼の上京附近を迂れるものにして、宿泊せるウルヂムレンの村は、高さ三百七十米突なるに見れば、以前の旅行には、バロメーターを携へ行かざれば精確は期し難きも、遼の上京の高さも四百米突内外ならん乎。

本日の溫度は朝五十七度、晝七十五度、夜五十八度なり。

二、阿嚕科爾沁王府

十月十九日。 余等の宿泊せる村落は、春の旅行の際宿泊せる村の近くにして、ウルヂムレンの流域なり。余等は之より阿嚕科爾沁に向つて進みしが、此の道は既に春の旅行の際に述べたれば之を略す。出發後車にてウルヂムレンを渡り、少時にしてオボのある處に達せり。此

ウルヂムレンを渡る

の附近の最高處にして五百米突あり。ウルヂムレン河床より高き事、實に百三十米突なり。

此の附近は四百米突以上の處に杏の木多し。春余等の經過せる際は、桃色の蕾なりしが、今は既に實を結び居れり。

暫らく山の間を進み行けば、曾て屢々往生せる山頂の峠(五百六十米突)に達せり。此より漸次下り行きて、トーグスアイラと稱する村落に入るや、余等の馬夫は此處に一泊せんと言ひしも、余等は阿嚕科爾沁王府迄行かんとて車を飛ばして進む。此邊はオームリン一帶の平原なれば、車の進み早くして氣持宜し、稍ありて河岸に出づ、高さ三百六十米突強なりき。

余等は直ちに河を渡り、尚も王府の方に進みしが、此の時日は西山に沒せんとし、王府附近の地に入れる頃は既に夜なりき。先づ宿泊所を求めんとて、支那人の家に入りしも夜なれば肯ぜず。斯る交渉をなしつゝある際、阿嚕科爾沁王府より役人來り、大に周旋せる結果、遂に此の支那人の家に一泊する事となれるが、此の家の主人も大に余等を歡待するに到りしかば、心地よく一夜を明せり。

此の附近は興安嶺に接し居るを以て、非常に高き樣思はるれども、余のバロメートルに感ずる處にては左迄高からず。却てウルヂムレンより低き位なり。即ち此處の高さは二百六十米突に過ぎざりき。

糞に活なりし杏は實を結べり

トーグ村

オームリンを渡る

阿嚕科爾沁王府に入る

本日の溫度は朝五十度、夜五十度なり。

第二十一　阿嚕科爾沁より老哈河

一、阿嚕科爾沁王府出發

阿嚕科爾沁王府出發

十月二十日。 今日は潢河の流域に向つて進まんとす。出發に臨み阿嚕科爾沁王府より、余等に隨行せしめんとて一名の役人を遣はせり。然るに此の役人は、餘り身分のよきものに非ず。余等は之迄の旅行中、斯る身分の男と同行したる事なければ、今少しく身分の高き役人を隨行せしめ度しと、王府迄申込みたる結果、更に一人のメリーン來り、前の男と共に隨行する事となれり。斯て余等一行は午前九時過る頃、王府附近なる余等の宿所を出發し、急ぐ旅なれば王府にも立寄らずして進めり。

王府の地勢

阿嚕科爾沁王は前にも述べたる如く、此の附近に於ける蒙古諸王の盟長にして、最も勢力あり。又た阿嚕科爾沁の土地は一方興安嶺に臨み、一方東戈壁の砂漠に面し、地理學上興味ある地なり。而して之等兩地の南には潢河の流あり。又た其の北にはヘヒルコロ、ウルヂムレン

の二河の、タブソトノール（チガステノール）と稱する湖水に向つて流れ行くあり。王府の位置は恰も此ヘヒルコロ、及びウルヂムレン兩河の間に位するものにして、地位尤も注意に値す。

オームリン河畔の景況

余等は之より主として、南方に向つて進まんとするなり。宿所を出でゝより暫らくの間は、少しく東に寄れる南の方向に向ひ、興安嶺の延長せる丘陵の上を進み、三十清里計りにして一河に達せり。此はオームリン河にして、此の地より更に東南方に流れ、興安嶺に源を發するヘヒルコロと合し、遂にタブソトノールに注ぐなり。此のオームリン河畔は、阿嚕科爾沁領中最も富める地方にして、阿王管下の蒙古人は、多くはオームリン河畔に居住すと云ふも可なる程なり。

フルブ村

阿嚕科爾沁の風俗

此處に一村落ありフルブと稱す。天幕張りの住家處々に散在せり。余等は村内第一の富家と稱する家に入る。時に午後二時頃なりしかば、此の家にて茶を喫む事とせるに、主人も出て來りて色々の談話をなし、又た待遇に努めたり。

阿嚕科爾沁の蒙古人は、風俗其他巴林の蒙古人と相似たる點甚だ多し。此の家の如きも天幕張りとは言へ布を用ひず、多くは蕊籠の如きものを以て圍ひとせり。此地は又た黍の收穫盛んなれば、比較的富裕にして、農業と共に牧畜をも營み、乳等も多し。此家に休憩し居る時に、主人の腰に五銖錢をつけ居るを見たり。以て此の附近にも古錢の落ち居るを知る可し。

オームリン河畔の石器及び古錢

尙ほ又た此の家の天幕の中に、石斧を吊し居るを見たれば、余等は不思議に思ひ、之を手に取りて注意せるに、其の一方には刃を附け、他の側の中央に穴を穿てるものなりき。此の穴に棒を貫き鉞として用ひしものならんか。之等は石器として餘程珍らしきものなり。之等に見るも、オームリンの流域には、古くより住民ありしを考ふ可し。フルブの高さは三百米突なり。

チヤホテ村

余等は此處にて昼飯を濟ませ、更に旅行を續けたるが、十清里計りにしてチヤホテ村に到着せり。此の村も亦オームリンの北岸に臨み、其の高さはフルブと同じく三百米突なり。之によりて此の附近は、餘りに高低無きを知る可し。又た此の邊の地形を見るに、河の兩岸は丘陵聳え、兩丘陵間の平地をオームリン河流れ居るなり。而して河の流域は悉くマンハ的にして、樹木は殆んど伐り盡され、全く樹木無しと云ふも可なり。

オームリン河畔の地勢

余等は今夜此村に一泊する事とし、其村内の或る家に入りしが、主人は羊一頭を屠りて余等に饗應せり。此の家の主人も亦、腰に三個計りの古錢を附け居りしが、小泉直一、天啓通寶、崇寧通寶等なりき。

之を要するに、今日經過し來れる道は王府の丘陵より、オームリン流域に出でゝ、其の北岸を傳ひしなり。

本日の溫度は朝五十四度、晝七十六度なりき。

二、狼水を渡る

蒙古人微發を恐れ車馬を牽いて逃ぐ

オームリンを渡り山路に入る

十月二十一日。 余等は先日巴林にて車を雇ひ來れるを以て、單に馬のみを代へて旅行を續くる事となり居るなり。然るに昨晩余等此村に宿泊するや、蒙古人等は余等の徵發を恐れたるものゝ如く、車、馬等を曳きて概ね逃げ去れるが如し。即ち朝此の村を出發せるに、車の逃げたる轍の跡右往左往に印するの有樣なり。彼等は又余等の全く通過せるを見るや否や、彼方此方の丘蔭より、車馬を牽きつゝ出て來る樣、實に滑稽を極めたり。

暫らく進める後ちオームリンを渡る事となれり。河は小なれども水多し。河を渡りては山と山との間を、南方に向ひて進みしが、全く山間を行くの思ひあり。山には樹木一本も無し。河を渡りてよりは、オームリンの流れ漸く余等と遠かり、遂には全く山の間に隱れたり。

余等は斯る山間の平地を、南に南にと進み行けるが、途中車の辿りたる跡彼方此方にあり。

ホンダラッカ村

トーテンソム

地勢俄かに變ず

興安嶺と東戈壁砂漠との境界

河を渡りてより六七清里計りも進める時、道端の西方に喇嘛廟を見たり。此處に又一村落あり。此處を通過し單調なる道を、尙ほも南に向つて行く事八清里計り、又一村落あり。蒙古人の家處々に散見す。尙ほ四五清里にしてホンダラッカと稱する村に達せり。時に正午頃なりしかば、車を降りて茶を喫む事とせり。

此處に少時休憩せる後ち、馬を代へて更に旅行を續く。暫らくしてトーテンソムと稱する喇嘛廟に達せり。此の寺は東方の山上にあり。余等は之迄正南方に向つて進み來りしを、寺を出でゝよりは、少しく東に寄れる南の方に向ふ事となれり。こは道を挾める兩山の走り具合に據るなり。トーテンムより十五清里の間は、道は依然山間の平地にして、全く無人の境なりしが、此處に地形一變し、之よりは俄かに廣々漠々たる平地となれり。斯く地形の急に變化せるは、從來の山地即ち興安嶺の走り居る處より、平地即ち東戈壁の一部分たる潢河流域に出でたるが爲めなり。即ち此の地を境とし、北方は山又山或は丘陵にして、南方は殆んど一物の眼界を遮ぎるもの無く、地平線の限涯を知らざる砂漠地なり。されば此處を進みて北の方を顧みるに、丘陵山脈は恰かも屏風を立てたるが如く、規則正しく並立し、輪廓正しく兩地の境界を爲し居れり。山地を離れてよりは、氣候も亦一變せるが如き感じを惹き起し

ぬ。

狼水を渡る

チョノオッソの流れ

余等一行は丘陵を離れてより、道を少しく東に寄りたる南方に取りて進みしが、廻て全く砂漠の上に出て、何處を見るも人家も木も無く。只草の生ゆるを見るのみ。更に進みて一河の岸に出でたるが、之を渡るには危險ありとの事なりしより、豫めホンダラッカの村落より若者を伴ひ來り、之に案内せしむる事とせり。丘陵より此河岸迄は十清里弱なり。此の邊の蒙古人等、此の河をチョノオッソと稱す。チョノは狼オッソは水の義なり。此は常に狼の水を飲みに來るを以て、斯く名付けたるなり。此の地の高さは百米突計り、以て漸次土地の低下し來れるを知らん。

チョノオッソは巴林の遊の上京附近より、流れ來るウルヂムレンの流にして、此の附近に到りて單に其名を變へたるなり。此處の水は恰かも沼澤の如くなり居り、其幅頗る廣く二清里計りもあらんかと思はる、水の中に草生え、一見水溜の如けれども流れは盛なり。余等は蒙古旅行中、斯る水溜に際會せる事曾て無し。一行は此の中に馬車を乘り入れて、進む事となりしが、或處は水急にして或處は水溜を爲し、車を進むること困難なり。漸くして河岸に達せるが、周圍は廣々たる處にして、岸には草生ゆるのみ、木もなき沙地なり。附近に人家とても無

蒙古人鹹湖無しと云ふ

ければ、狼の水を飲む爲に出て來るも事實なるべく、チョノオッソの名を附せるも、正當なるが如く感ぜられ、何となく氣持惡しき處なり。然るにこの水岸の草間に二三軒の家を見る。聞く彼等は喀喇沁蒙古人にして、生活に困難せる結果、此處に來りて住するものなりと云ふ。一般に何處の蒙古にても、他旗より來れる者には、其地の最も惡き場所を與ふを通例とす。此の河は大清一統志等にも、其名を記し居る位有名なるものにして、此處より更に東方に流れ、彼のヘヒルコロと合して、タゾソトノール(チガステノール)に注ぐなり。此の邊りウルヂムレンの汎濫して、二清里計りの澤になり居るを見るに、彼のヘヒルコロは、又此の邊に流れ來り居るに非ずやとの疑も生ず。又た彼のタゾソトノールと稱する湖も、或は既に此附近より始まり居るに非ずやとの考も起れり。此の附近は或る意味より言へば、湖水の一部とも稱すべく、之を東すれば更に大なる湖水となるなり。兎に角此の事實は將來注意を要すべきものなり。

余等は阿嚕科爾沁より、隨行し來れる蒙古人に向ひ、此の澤の東に湖水ありやと問ひ、且つ、地圖はタゾソトノールと書き居れるが、果して之あるかと尋ねたるに、彼等は審しげに斯る湖水は無しと答へぬ、此は當然の事なり。如何となればタゾソとは鹽、トは持つ、ノールは湖即ち鹹湖の意味なり。蒙古人は由來地名には虛僞の事を附せざるを以て、若し鹹湖とすれば

タブソイルとチガステイル

西烏珠穆沁に於けるものと、同様ならざる可からず。然るに余等の間に接して、蒙古人等は或はチガステノールに非ずやと答ふ。チガステノールとは、魚の居る湖と云ふ事なるが、之ならば有りとの事なりし。之等は今後の研究を要すべき事なり。

シムソムの廟

又た蒙古人の語る處に據れば、此處より馬を駟れば、ウルヂムレン沿岸のシムソムの廟迄は、一日にて達すべしと言へり。

此の邊の地形は學術上、最も注意すべきものにして、湖を起點とすれば、其の南を流るゝはウルヂムレン即ちチョノオッソンにして、北よりするはヘヒルコロとオームリンなり。而して阿嚕科爾沁王府は、實に此の兩河の中にあるなり。又た此處は彼の東胡民族、殊に契丹民族雄飛の地にして、遼の上京は實に此のチョノオッソンの上源地にあるなり。されば此の地は契丹雄飛の歴史等と、考へ合せて最も趣味ある處なるが、兎に角湖水は、此處より餘り遠からざる處に在ると考へらる。

東胡契丹の雄飛地

附近一帶の地勢

今此の河岸に立ちて過ぎ來し方を顧みれば、興安嶺一帶の山丘は、恰かも屏風の如く立てるを見る。又た南及東の方は、全く眼を遮ぎるものなき平原にして、余等の立ち居る地は草密生し、氣持惡き思ひせり。

夜道を辿る

廣原の流星

余等は河より上りてより、更に東南に向つて進みしが、道は最も單調にして、少さき草の生ゆる砂地なり。途中人家は軒も無し。斯かる中に日全く暮れて、夜道を辿る事となりしが、一人の役人は宿を見出さんとて、馬を駟けて先發せり。然るに夜は次第に暗く、空には星現はれて出でぬ。茫々たる廣原の夜、時々流星を見る等、餘り心地よき事には非ず。斯くして二十清里計り進める頃、始めて火の光を見たり。此は余等に先發したる蒙古役人の、特に天幕の中に火を焚きて余等の到るを待ち居れり。余等即ち此の地に一泊する事とせるが、其夜亦例の如く羊二頭を屠りたり。

チエートム村

此の村は砂漠中の一孤村にして、チエートム村と稱し、人家は七八軒あるのみ。風俗及び家屋の構造等は、これ迄の阿嚕科爾沁に似たり。余は此の村にても亦五銖錢一個を得たり。此の地の高さは百六十米突。

本日の溫度は朝四十六度、晝六十八度、夜六十度。

三、老哈河に向ふ

俄かに寒氣を加ふ

十月二十二日。 此の時天候漸く冬景色を呈し來れり。此の村の附近は一望茫漠たる砂漠地にして、特に今日は朝より風烈しく、寒さ甚しければ、余等は冬の服裝に着換へたり。然るに隨行の役人は全く夏服のみなりしかば、到底堪えられずとて、此村より冬服を借り毛衣等を着たり。大陸の旅行には、之等は最も用心すべき點なり。

大陸旅行の注意

朝馬を代へて此の村を出發し、東西南の三方眼を遮ぎるものも無き、單調なる平原の砂漠地を、主として東南の間を進み、十五清里計りにして、始めてオラクテン村に達せり。高さ百四十米突あり。此の村も亦砂漠中の一孤村にして、天幕七八戸並び居るのみ。余等は此の村の入口にて、東胡の遺跡存在し居るを發見し、土器其他色々の遺物を採集せり。阿嚕科爾沁出發以來、自ら東胡の遺物を拾ひ、親しく其の遺跡に接したるは今日を以て始めとす。而して此處の遺跡に存する、土器には摸樣のあるものあり。曾て阿嚕科爾沁のヘヒルコロ沿岸にて、拾べると相似たるものなり。之迄嚕河流域にて得たる、土器の摸樣は單に點々の線を畫けるもの多かりしが、此處には點々の線のものもあれど、其他幾何學的即ち三角形の續き摸樣、又は菱形のもの等あり。之等は注意を要する事なり。

オラクテン村

東都の遺跡

土器の形式

オラクテン村に到着せる時、非常に寒冷を覺えぬ。先發隊の役人は既に余等の到着を報じ。

雁を飼養す

村内にて第一の蒙家に案内せり。此の家は此の附近に於ても、最も富めるものにして雁等を飼へり。余等は蒙古に來りしより、雁を飼へるは此時始めて見たり。余等此處にても治元通寶の古錢一個を得たり。此家は不完全ながらも支那風にして、火を盛んに焚き、支那風蒙古風折衷の御馳走を作り、餅等を盛んに燒きて余等の待遇に努めたり。

トンヅックソム

斐飯を終りて後ち、余等は此の村を出發する事となれるが、更に此の村よりタイチ一人を隨行せしめぬ。村を出て暫らくにして廟のある處に達せり。此の寺をトンヅックソムと稱す。之を經過し七八清里にして一河の岸に出づ、即ち潢河の流なり。此の附近に於ては潢河も想像より小規模にして、河幅は二丁以上位に過ぎず。而して其の兩岸には別に丘陵と云ふものも無く、河床河岸との間には、餘り高低なきが如し。此の時は水の少き期節なるべけれども、水量非常に渺なく、渡るに左迄の困難をも感ぜざりき。兩岸には柳樹頗る多し。蒙古人等は、此處にてはトッカイコロと稱す。余等は蒙古人に向ひ、潢河は何故に此邊にて斯く水量渺きかと問ひ試みたるに、此邊にては潢河の水彼方此方に分岐し居る結果、本流は斯く水量を減ずるなりと答へたり。特に爰に此の事實のみを一言す。

潢河出づ

意外の小流

潢河の水渺き理由

河を渡りて二清里計り東南の間に進み、始めてブッン村に達せり。此處も亦砂漠中の孤村

ブッン村

にして、人家は蒙古人の家五六軒處々に散在するのみ。余等は尙ほも旅行を續けんとせしも、之より先は村も無く、且つ老哈河の在るあり、之を渡るは非常に危險なれば、今夜は是非此の村に一泊せられ度しと、蒙古役人等頻りに請ひて止まざれば、日は未だ高く、漸く午後三時頃なりしも、此處に一泊する事としぬ。此の家の若夫婦は、大に余等の爲めに斡旋せり。今日は非常に寒さを感ず。

日高けれども一泊す

タルハガに近し

余等此の地にて地形を考へ見たるに、之より扎嚕特のタラハガ迄は、七八十清里にて達するを得べし。此のタラハガとは、即ち余の曾てシャーマン巫女の調査をなせる時、行けるの地なり。此の地は能く地圖等にも現はれ居る地名にして、之等によりて、今余等の居る位置をも知るを得たり。

此本日の溫度は盡四十九度、夜五十六度なりき。

第二十二　柰曼領に入る

一、老哈河を渡る

十月二十三日。今日も亦寒さ酷し、早朝ブッンの村を出發し、依然東南の間に向つて砂漠の道を進む。此の道には草生え居れるが、其の丈け非常に高きもあり。又た其間に樹木も生え居れり。之等に見るも、潢河流域に樹木多かりしを考へらる。

潢河々畔に樹木多し

此の草地の處に支那人の小屋二二見ゆ。蒙古人等の語る處に據れば、此の地は蒙古人の打捨て居るものなるが、彼等支那人は之を開墾し居るなりと。之に依り蒙古人の不精にして、支那人の勤勉なるを知る可し。蒙古人が不用地として打捨てゝ顧みざる所も、支那人は木を伐り草を刈りて開墾し、之を畑に耕すなり。而して彼等支那人等の土地開墾の方法は、風向のよき日木草に火をつけて、之を燒きたる後を耕すなり。されば其の爲め、僅かに現存する樹木も枯れたる多く、此の日も途中拾數丁の間、樹木の燒けたる處を通過せり。

蒙古人の棄てたる地を支那人開墾す

支那人の開墾法

進む事十五清里計りにして河に達す。之れ乃ち老哈河なり。余等は此處に始めて老哈河の流に接したるが、之によりて考ふるに、此の邊に於ては潢河と老哈河との距離は、僅かに十七清里計りに過ぎざるが如し。此の附近に於ける老哈河は、潢河の小流なるに反し、河幅も廣く水量亦多し。處々に淺瀨の如き處あれども、河幅三清里計りもある可く濁水流れ居れり。兩岸は高き砂漠地にして、木の根切り株の大なるもの等、流れつき居るを見たり。

老哈河に達す

潢河と老哈河の接近

愈々此の河を渡る事となれるが、蒙古人等大に心配し、ブッンの村より伴ひ來れる男に瀨

阿嚕科爾沁と奈曼との境界

老哈河を渡る

ローヘンコロ

ムンチ村

奈曼の風俗

踏みをなさしめ、且つ水案内を雇ふ事とせしかば、余等は暫く岸に車を停めて之を待てり。

老哈河の南岸には丘陵一帶に延長し、其の上に處々樹木を見る。又た政治上より觀察すれば、之より北方に阿嚕科爾沁、南方は奈曼にして、恰かも此の河を以て、兩者の境界線を爲し居るなり。兎に角老哈河は、此の邊にては黄河より大にして、此の時既に斯の如くなれば、一朝雨期に際せんか、到底渡るを得ざる大河となるべし。

暫らくにして前岸より水案内者來りしかば、余等即ち車を川に乘り入れたるに、水勢中々急にして、屢々押流されんとせり。此の日は水最も少き時なりしも、尚ほ殆んど馬の腹、車の臺をも浸さん計りなりし。漸くにして前岸に達せるが、此の時阿嚕科爾沁の蒙古人等十四五人、貨物を車に載せ來り、將に之を渡らんとしつゝありしかば、余等は暫らく彼等のせん樣を注意せしに、何れも裸體になり、車の上又は牛の上に乘りて渡り始めたりしが、水は牛の腹或は車の臺の上に達せるもありき。老哈河は河幅大なるのみならず、屈曲亦盛んなり。而して此の附近の蒙古人等は、之をローヘンコロと稱せり。

老哈河を渡れる處に一村あり、ムンチと稱す。此の村は既に奈曼管轄にして人家十五六戸、其の風俗東翁牛特に似たる點多く、其の住家の如きも土壁を作りて、天幕の形となしたるものあり。又た支那風のバイシングル多し。又た阿嚕科爾沁等にては、毛衣を着し居るもの多かりしが、此の地に於ては、小供を除く外は殆んど綿服を用ひ、又た巴林阿嚕科爾沁等にては、腰に小刀を下ぐる風あるも、此處に至りては愈々尠し。

境界の村には重なる役人を置く

余等は此の村のメリーンの家に導かれ、其家にて中食せしが、主人は物の解りし男にて、余等に蒙古風の饗應を爲し。又た種々の世話をなせり。此家は富裕なるが如く、家人も中々多し。元來蒙古の制度として、其の境界の處の村には、重なる役人を置くを例とす。此處も亦其の一例たり。

此の家に休憩し居れる際、一人の支那人入り來り、余等と色々の話をなせり。彼は旅商人なるが、蒙古語も上手にして此の村に家を構へ、蒙古人等と取引をなし居るなりと云ふ。余等は蒙古人の身體測定、其他種々の調査をなせる後ち此の地を出發せり。

道は依然東南の間に向つて進み、暫らくして丘陵の上に差し掛れり。此邊は一帶にマンハにして、此のマンハの中に陶器土器の破片等の散亂せる處もあり。而して此の陶器は黄河方面にて見たると同樣褐色の物なり。ムンチの村の西方に當りて一喇嘛廟あり。モンチヤク廟と稱す。又たムンチの村より二十清里計り進める處に小さき池あり。此の附近にも東胡の土

老河畔の遺物潢河々畔のものと同一なり

器の破片散亂し居るを見たり。其模樣は線を引けるが如きものにして、潢河方面にて得たるものと同樣なり。即ち老哈河方面と潢河方面とは、同一民族の居住し居れるものなる事明かなり。

池の在りし處よりは、砂漠愈々甚しくなり來りしかば、之迄二頭の馬にて車を牽かせ居れるを、更に一頭を加ふる事とせり。又た池の處よりは南に向つて歩む事となりしが、眼を遮るものとては丘陵、草木等に過ぎず。全く無人の境を過り、南より更に西に方向を轉じ、池の處より二十餘清里にして、マルトルと稱する村に達せり。此の邊にては畑を耕せる處あり。又た樹木も多く、柳、楡等の大木蒼苔と茂れるを見たり。

マルトル村

此の村は人家二十戸計りあり。又た奈曼王の來遊する場所と見え、土塀を圍らせる大なる建物あり。樹木の多きも斯る建物あるが爲めならんか、余等はメーリンの家に入りて一泊せんとせしに、容易に之を肯ぜず。或は老母病氣なればとか、或は主人留守なればとか、言を左右に托して、如何にするも泊めんと言はず。然れども余等は役人に命じ强て車を其家に牽入れしめしに、家も廣く、老母の病氣等は全く僞りなりき。後ち主人も家族も出て來り、余等と共に種々の談話に打ち興じぬ。即ち此の附近に至りては、支那人の影響を蒙る事愈々甚しく、阿嚕科爾沁及び巴林等に比して、人情頗る輕薄なり。

奈曼王の別邸

役人の横着

人情輕薄なり

今日の道は潢河南岸の、ブツン村より出でゝ老哈河を渡り、此處迄來れるものにして、既に地理學的に老哈河の流域なるが、之より以後は、愈々老哈河の流域を傳ふ事となるなり。

本日の温度は朝五十二度、昼六十二度、夜五十八度。

十月二十四日。 午前七時頃モルトルの村を出發す。主として西に寄りたる南に向ひ、進む事五清里計りにして、ウルムラの村に到着す。此處も亦一小村落なるが、此の村の蒙古人は既に支那風の不完全なる、土の家に往めり。又た其附近には小樹少し計りあり。此村を出てゝよりは、復びマンハの道を進む事となれるが、余等は此處にて東胡の土器の破片を得たり。之に依りて昔此邊に住民ありし事明かなり。此の地はヲリツン河の流域にして、道は平坦なるマンハなりしが、余等は之れより此河の沿を傳ひて進む事となれり。而も未だ河には接近せず、其の流域を歩み居るなり。

ウルムテ村

ヲリツン河流域

斯る道を進み居る中に、空は雨模樣を帶び來り。次いで雨降り出づ。一行雨を冒して進みしが、此の間樹木非常に多く、或は森林帶をなし居る處もあり。其の大部分は柳楡にして、樹木は多くは大なる老樹なり。之等に見るも昔は此邊一帶に、樹木を以て蔽はれ居りし事明なり。

河畔樹木多し

樹間の喇嘛廟

又た此の道に於て三つ計りの廟を見たり。之等の廟は樹木の間に設けられ居るを以て、景色最も好し。寺の名は一はジョーテンソムと稱し、一はトソラクチソムと呼ぶ。他の一は今其の名を逸したり。

オムンナムサ村

森林の間を進む事四十清里計りにして、オムンナムサ村に到着す。此時雨益々降りしきりしを以て、余等直ちに車より降り、此處に休憩して茶を喫む事とせしが、時に午後一時頃なりき。

雨益々降りしきる

余等の入れる家の主人は、柳の枝を折り來りて火を焚き、余等の寒さを暖め呉れたり。此の邊には樹木多ければ、之を薪として用ふるに豐富なり。又た此の村に居住する蒙古人の家屋を見るに、全部支那風のバイシングルにして、風俗の如きも餘程支那化し居れり。是に依りて奈曼の蒙古人の、非常に支那化せられ居るを知るべし。此の村の高さは百六十米突なりき。

燃料豐富なり

奈曼蒙古の支那化

村を出て、より、河に接近して進む事となれり。河は差迄大ならざるも水量多く、砂の間を通じて流れ居りしが、此の河は奈曼王府の附近より流れ始め、余等の通過し來れる道に沿ひて流れ居るなり。蒙古人の語る處に據れば、此の河の末はマンハの中に入りて消失し、老哈河には合せずと。而も今日尚斯く相當の流なれば、昔に於ては比較的大なる河なりしやと思はる。余等は西に寄りたる南に向ひて、尚ほも進み行きしが、此間處々に柳の大木を見たり。

砂丘に隱れたる村落オラヌテン村

此の邊一帶にマンハにして、車を進むるに最も困難せり。村を出て、より二十清里計りにして、途に河を渡るも、之よりは砂の丘陵にして、全く村落を見ず。然るに先發せし蒙古役人は、余等を案内して、砂丘の間に存する村に入れり。此處はオラヌテンアイラと稱し、高さ百九十米突なり。余等は此處に一泊する事とせり。

今日の途中に於て處々小村落ありしも、要するに余等は、ヲルソン河畔に沿ひて歩み來れるなり。

本日の溫度は華六十度。

二、奈曼王府

奈曼王府に達す

十月二十五日。 早朝オラヌテン村を出發し、尚ほもマンハの丘陵を進み、暫らくにして再びヲリソン河を渡り、之に沿ひて進む。最初はマンハ丘陵なりしが、進むに隨ひて開墾せられたる土地多く、且つ地も廣く、土は土壌的になり來り、純粋のマンハには非ず。即ち此の地はヲリソン河の上流地にして、奈曼王府のある處なり。出發以來二十清里にして王府に到着す。時に午前十一時なりき。余等は王府に挨拶したる後ち、尚ほ旅行を續けんとせしも、車及

王府の地位

び馬の都合にて、此處に一泊する事となり、王府よりの案内にて、附近の富みたる家に入る。阿嚕科爾沁の役人は此處より別れり。

王府附近の地は上述の如く、少しく土壌質を帶び居る爲め、此の時は既に收穫を終りし後なりしも、畑の耕され居るもの多きを見る。家屋は王府を中心として、役人の家等處々に建てられ居りしが、總べて支那風なり。又た此王府附近は、今は斯く畑地になり居れども、よく〳〵注意すれば、畑の中に處々大樹の古株等存するあり。之によりて考ふるに、此の地も比較的近き頃迄樹木鬱蒼たりしを、畑を耕さん爲めに、或は燒き或は伐採せしものならん。王府の前には子ルソン河流れ居れるが、此の樹木を伐らざりし前には、水源地として、今少し多量の水を流し居れるものならん。又た王府の西方には、タラカンタライと稱する、大なる湖水あり。王府附近は斯く農業に適すれども、此地以外は又盡くマンハなれば、此處に王府を設けたるも尤なりと思はる。

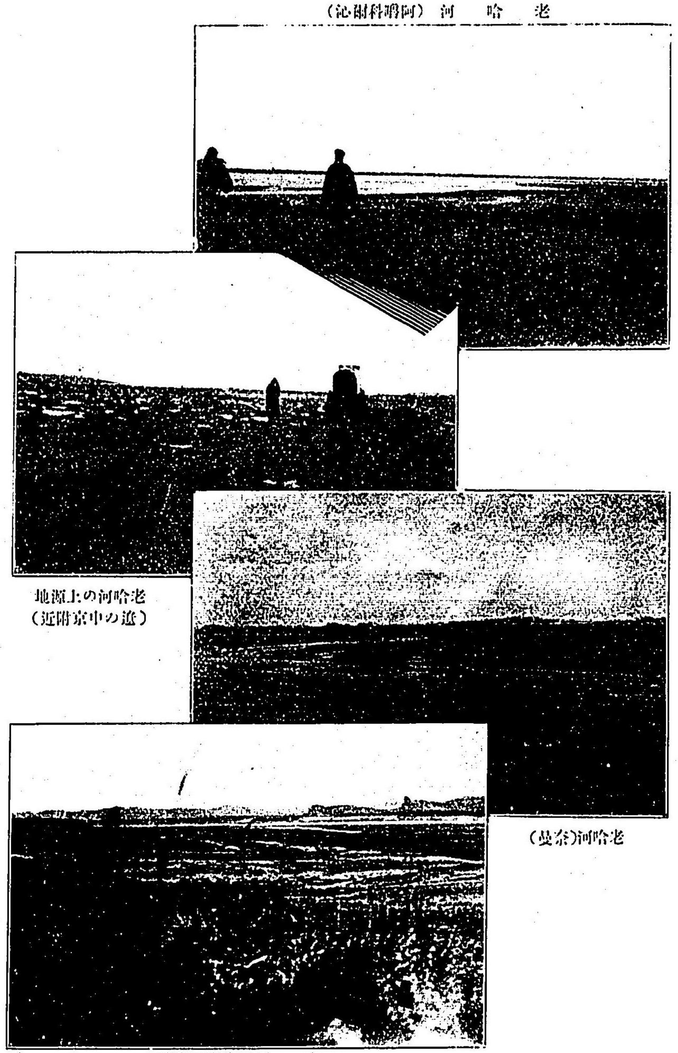
子ルソン河水源地の松林

タラカンタライ湖

農業盛なり

奈曼は斯の如く牧畜既に衰へ、農業を主とするを以て、黍の如き穀物には不足なく、殊に余等の宿泊せる家の如きは、野菜類をも蓄へ居れり。之に就て一言せんに、此の附近にては人參、大根、白菜其他の野菜を細く切りて、之を鹽漬になし置くなり。斯くすれば何時迄經つも

野菜の鹽漬



老哈河（阿嚕科爾沁）

老哈河上の河源地（遼の中京附近）

老哈河（奈曼）

シラムレン河畔（東翁牛特）

色は少しも變らず、而して此の地の如き北方にては、野菜類は常に有るに非れば、此の鹽漬のものを用ひて、種々の料理を作るなり。例へば之を漬物として用ひ、又た豚羊等の肉と一緒に煮て汁物にする等、兎に角調法なるものなり。余等は久し振りにて、野菜を食したる事なれば味殊によかりき。

王府の兵士

此の索曼王府には阿嚕科爾沁、巴林等と異なり、小數なれども兵隊を有す。彼等は支那風の衣服を着し、各々一挺宛の銃を所持す。斯る組織は之迄北方の蒙古にては、餘り見ざりし處なり。

贈物の注意

余等の王府滞在中、王の小姓の如き人來訪し、小銃を余に示し。幾金かに買ひ取り呉れずやと語れり。尚ほ彼の言に據れば、此は或る外人旅行者の王に贈れるものなるが、彼等は斯る文明の利器を充分用ふる事も出來ず、殆んど持て餘し、寧ろ之を金に代へんとし居るなり、之等よりて考ふるも、斯る地方を旅行する人は、其土地相應のものを贈る事必要にして、徒らに文明人の珍重するものを贈りて、少しも役に立たざるなり。

余等は滞在中種々の調査をなし、又た採集物の整理等に從事して日を送れり。王府の高さは二百米突にして、本日の溫度は朝五十六度、壹六十度、夜四十八度。

日出前王府を出発す

湖水に夢を貪る雁群

荒寥たる朔北の冬

ノルテ村

十月二十六日。日出前に旅装を整へて出發す。奈曼の王府よりは、兵士二人と御者一人を隨行せしめたり。王府を出でゝよりは、主として西の方に向ひて進む。未だ日出でざれば寒氣甚しく。恰かも日本の冬の朝の如し。行く事二三里計りの處に、道の右方に當りて湖水あり。之れ即ちタラカンタライにして、其の周圍十清里計りあり。朝まだきの事なれば幾萬千とも數を知らざる多數の雁は、湖水の彼方此方に眠り居しが、或は既に眼を覺まし、群を爲して南の方に飛び行くもありき。朝の冷氣は水面に映じ。未だ日も出でざる時、一の樹木も無きマンハの中に立てば、朔北の感一層深きものあり。

湖水に沿ひて十清計りも進めばマンハの丘陵に出づ。此處にノルテアイラと稱する一小村落あり、高さ百八十米突、今日の道はマンハの間を行く事なれば、此處にて茶を喫まんとて車を降りて或家に入れり。隨行の兵士大に此間に周旋し、主人に命じて火を起さしめ、又た茶を作らしめて喫めり。此處にて種々の調査をなし、又た寫眞等を撮影せり。此の主人は非常に親切なる男にして、余等の爲に道案内せんとの事なりしかば、彼と共に其家を出發せり。

盜賊の巣窟

チヤクトリンノール湖

鼠色の土器

チヤクトリン河

道は樹も無く人家も無きマンハの丘陵の上にして、處々に草の生え居るのみ。斯る道を正西に向つて進む中、途中一軒の軒傾ける家を見たり。蒙古人の話によれば、此の家は元蒙古人盜賊の集合所にして、十數人の賊此家に隊を爲し、旅人を掠かし又は此の附近の人家を侵し、或は人を殺し物を奪ふを事とし居りしが、數年以前奈曼の王府にて彼等を捕へたれば、其後此の家は全く廢屋となり、之より惡人跡を絶ちしも、未だ彼等の捕へられざりし以前は、此の附近は危險にして通行もなり難かりしと。之等によりて考ふるも、此の地方の物騒なるを知る可し。

ノルテアイラより進む事二十清里計りにして、丘陵を下る事となれり。而して此の處にも亦湖水あり。チヤクトリンノールと稱し、周圍十清里計りあり。此湖水にも雁多く、余等を見て飛び去る樣、實に奇觀なりき。此處にても亦樹木無き、鼠色土器の破片を得たり。以て此處にも昔時住民ありしを知らん。余等は湖水に沿ひて尙ほも西に進みしが、此邊土地低し。思ふに昔は此の湖水、今少しく大なるものなりしならん。湖水より一河の流れ出づるあり。チヤクトリン河と稱す。余等は之に沿ひて進みしが、此河は後マンハの中に盡くると云ふ。

次いで余等は其の河を渡りしが、湖水の處より二十五清里計りの處に一喇嘛廟あり。此の

エリンソム

廟をも亦チャクトリンソムと稱す。余等は此の廟に立寄らんかとも思ひしが、直ちに進む事とせり。此の日朝より南風吹き居りしが、此の時愈々烈しく、非常に寒さを覺え來り、又砂を飛ばし車を行るに困難せり。チャクトリンソムより十清里計りにして、夕暮頃エリンソムと稱する廟に到着し、此處に一泊する事となれり。此の地の高さ三百八十米突。

古城趾及び東胡の遺物

此の廟は比較的宏大に、各房の中も立派にして。又た溫床を備へ居れるが、之を焚きて余等は寒さを防げり。外は風尙ほ盛んに吹き荒めり。此處は又た昔より要害の處なりしと見え、今は餘程壞れ居れるも古き城の土塀を存せり。恐らくは遼時代のものならん、又た此の附近にも人の住む者ありしと見え、此の廟の前の丘陵の頽れに於て、東胡の土器の破片を拾へり。之にも亦潢河地方と同樣なる、突つき模樣及び幾何學的の模樣ありたり。此の夜は種々の取調等に從ふ。

本日の溫度は朝五十四度、晝七十七度、夜五十九度。

十月二十七日。 今日も亦風强く寒さ酷し。午前八時頃エリンソムの村を出發せしが、道は等しくマンハの高き丘陵にして、人家一軒も無し。少しく南に寄れる西に向ひて車を進め、丘の上にて東胡の土器を採集せり。斯る丘陵の上を進む事二十清里計りにして始めて、エリヒンソムと稱する、マンハ中の一村落に到着す。之亦貧村なれどもタイチの家あり。余等は其家に入りしが、タイチの家と雖顏る貧乏なるが如く、家は支那風にして、家内には品物あちらこちらに亂ちばり、不潔なる事甚しけれども、之以外別に家も無ければ、止むを得ず此家に入れり。タイチは始め余等の入るを好まぬらしかりしも、余等は之に頓着する事無く其の家に入り、茶を飲み又た朝飯を認めたり。此の村を出でゝよりは、少しく南に寄りたる西方に向ひて、マンハの道を進む。此の附近マンハの小丘の間に四五軒の家ありしが、其處にも亦タイチの家あり。タイチは余等一行を出迎へたるも、余等は此處に休む必要も無く、又た風非常に烈しければ、寧ろ早く先に進みて泊らんとて、此處を通過せり。

東胡の遺物

此邊マンハの丘處々に起伏し、殆んど人の住まるべき處とも思はれされど、現に村落のあるあり、又た湖の附近其他に於て、東胡の土器の破片の存するに見れば、昔より住む者ありしなるべし。而して之等の遺物には突つつき模樣、菱形模樣及び八つ手貝の模樣を附し、又た土器の縁に、二重三重に縁模樣を附せるもあり。之等に見るも老哈河沿岸に住めるものと、潢河

黑水村

城廓の如き家に入る

沿岸に住めるものとは、民族年代殆んど相異ならざるを知る可し。

此處を出て、より等しく南西の方向に向ひ、淋しきマンハの丘陵の上を進み、湖水より二十清里計りにして、ハラオッソと稱する村に到着す。此名は蒙古語にして、之を譯すれば黑水と云ふの義なり。而も此村には今日蒙古人一人も住まず。全く支那人の部落になり居れり。殊に此村は大金持の一族にして、周圍には高き土壁を作り、其の中に家を建て居れるなり。蒙曼の役人は其の家に車を牽き入れたるも、最初は中々泊むるを肯ぜず、再三再四交渉して漸く承諾せり。此家には奴僕も非常に多く、家恰かも城廓の如し、之れ土匪其他に備ふる爲めならん、余等は此家に一泊し。種々の取調を爲せり。此の地の高さは二百八十米突、此の家は丘陵を利用して土壁を築き、其の中に家を建てたるなり。

本日の溫度は朝四十六度、晝四十六度。

第二十三　敖漢より赤峰

一、敖漢王府

十月二十八日。まだ日の昇らぬ中に出發し、暫らくして丘陵を上り、等しく西々南の方に

老哈河南岸を進む

蒙古の馬盜人

東胡の鐵器土器及び石器

向ひて進む。丘陵の上より西の方を望めば、老哈河の流るを見る。即ち余等の今歩み居るは、老哈河の南岸なり。此の丘陵の上には人家も無く、又草も木も無く全く淋しき處なり。

此の時余等の後より、一人の支那人一生懸命に驅け來りしが、漸く余等に追ひ付きしかば、其故を問ひしに、昨夜彼の家に馬盜一人忍び入り、馬を逃れ去りしかば、其を捕へんとて追ひ行くなりとの事なりし。されば余等に隨行せる兵士は、幸ひ砂の上に其の足跡とも思はるゝものを印し居るを以て、之を進り行かば其の盜人を捕へ得べしと敎へるに、彼は其の足跡を傳ひて驅け去れり。之に見るも此の附近には、斯る盜人の多きを知る可し。

又た此の丘陵の上に於て、余等にとりて最も重要なるものを發見せり。其は前にも度々言へる東胡の遺跡なるが、處々に鐵鋒の殘り居るに見れば、昔鍛冶をなし居りし事明かなり。其他鐵の破片、石鏃、石斧、土器の破片等も多く散亂し、土器には取手、模樣等を附せる赤色のもの、黃河の方面に存すると同樣のもの、及び異なれるもの等數種あり。又た褐色の陶器の破片も此の中に混じて存在す。此は黃河方面にても屢々見たる處なるが、之等の遺物は東胡民族の、老哈河流域に居住せる事を研究するに就て、頗る重要なる事實なり。

余は此處にて種々の調査を爲せる後ち出發し、ハラオッソより五清里計り進み、始めて喇嘛

テリタハンソム

廟に達す。此の寺はテリタハンソムと稱し。餘り大なるものに非ざるも、位置は老哈河の丘陵の上に位し、老哈河は其の直下を流れ居るを以て、景色尤も佳し。余即ち此處にて寫眞を一枚撮影せり。

石斧製造の跡

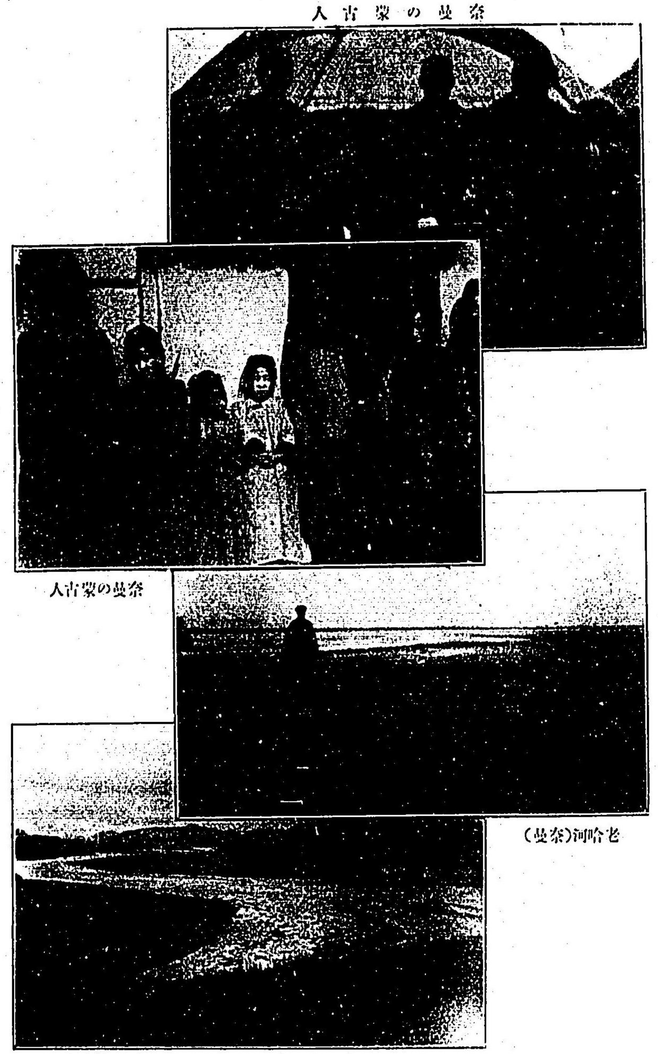
余等の此寺に到着せる頃は、未だ朝早かりかば、僧侶は火を起す用意をなし居らざりしが、余等の其の寺に入りしより、急に仕度して蒙古風の朝茶を作りて饗應せり。余等は茶を喫みたる後ち、再び老哈河に臨める丘陵の遺跡を調査し、又た此の寺の附近を注意せしに、東胡民族が石斧を造りし遺跡在りしかば、余等は其の材料を採集せり。

老哈河を渡らんとす

斯くて此處を出發し、丘を降りて暫らく老哈河の沿岸を歩み、五清里弱にして始めて河岸に達せり。余等即ち此處を渡らんとせしに、水急にして且つ、水は馬車よりも深くして渡るを得ず、止む無く河岸に沿ひて走る事十餘清里、處々に於て渡らんと試みたるも、遂に目的を達せず、漸く十餘清里にして適當の處に達せり。此處支那人の村落一二あり。

余等即ち此處にて河を渡らんとせしに、此處は河幅も廣く且つ水勢急なればとて、余等の御者は容易に渡らんとせざりしかば、余等は大に彼を叱し遂に之を渡る事とせり。然るに一人の兵士は、渡河の道筋調査とて行きし儘歸り來ざれば、已むなく他の一人の兵士は、水中に馬を

奈曼の蒙古人



奈曼の蒙古人

（奈曼）河哈老

（奈曼）河哈老

水急にして車危し

梁古人水中に飛込む

御者の惡戯

乘り入れ瀬踏みの任に當れり。元來河幅の廣き處は概して淺瀬を爲し居り、河幅狹き處は流急にして水深く、之を渡るは頗る困難なるを常とす。然るに今余等の渡らんとする處は河幅の最も廣き處なれば、大丈夫ならんとて渡り始めたるに、中流に到れる頃急に水流烈しくなり、且つ水深くして車の臺にも達せんとし、屢々押流されとする程なりしかば、馬は之に驚き、御者盛んに鞭打つも一向進まず、車も水の爲に倒れんとするに到り、御者は水中に飛び降りて馬を牽き、命辛々對岸に達するを得たり。

然るに此の御者は、水中に入りし爲め寒氣を感じたるものか、體内冷え渡り身慄ひ出し來り、自ら一命危しと云ふて恐れ戰き、余等は有合せの寶丹を與へ、決して斯る事無しと慰め且つ勵ませるも、彼は尙ほ恐怖を去らず。前岸に上りてより、砂の上を彼方此方に驅け廻り、體溫を保たんと勉めたるも、尙溫り來らず、全く元氣を失へる樣なりしかば、余の毛衣を彼に着せ、且つ暫らく休息せよとて、馬に乘せて前方の村に彼を遣れり。而も此の馬は、殘れる一人の兵士のものなりしかば、兵士は代りて余等の車を御せり。

斯くて尙ほも進み行きしが、此邊は支那人蒙古人雜居の村落にして、畑はよく耕され居るも、地は概ねマンハなり。之より敖漢王府迄は、十四五清里計りなるが、此時に到り寒さ愈

此の邊支那人の狡猾

敖漢王府に入る

役人王府の宿泊を拒まんとす

王府の位置

王無く秩序全く亂る

々甚しく、且つ道も分らねば、御者をなせる兵士、此地の支那人に道案内せよと命じたるに、容易に應ぜざりき。此の邊の支那人の狡猾なるは、之によりても知る可く、此地を旅行するものは、注意を要すべきなり。又た老哈河を渡るには、命賭けなるを覺悟せざる可からず。之より再び丘陵の上に出て、西北方に向つて進み、十四五清里にして始めて敖漢王府に到着す。時に午後四時頃なりき。即ち老哈河を以て、柰曼と敖漢との境をなし居るなり。余等は王府に車を乘り入れんとせるに、役人出て來り、王府には泊る處も無ければ、他に案内せんとの事なりしも、余等は王府内ならざれば、更に之より車の仕度をなさざるべからずとて、數次彼と交渉せる結果、遂に王府内に一泊する事となれり。此の地の高さは二百二十米突なりき。

王府の位置は前に老哈河を控へ、後は高き丘陵を負ふ。王府より老哈河迄は十五清里もあるべく、此間は凸凹無きマンハの丘陵なり。王府の建築は支那風にして、比較的立派なり。役人の家も此の附近處々に見ゆ。此の時敖漢には王なかりしが、其は曩に北京滯在中、臣下の爲めに弑せられたる以後、何人を王にせんかとの事に就て、非常の紛擾を起し、議未だ決せざるなり。されば王府内は殆んど秩序も無き有樣にて、氣の毒の感を禁ぜざりき。余等は此處に一泊して、明日又た旅行を續くる事とせり。

車來らず暮近き頃出發す

閉を開し一目散に車を驅る

本日の温度は朝五十四度、畫六十度。

十月二十九日。 今日は王府を出發する日なり。然るに車は待てども〳〵來らず、午後三時頃に到りて漸く來りしかば、余等は直ち出發せり。王府よりは騎馬の兵士二人隨行す。

出發は斯の如く遲く、日の暮るゝに間も無ければ、馬を早めて進み、途中蒙古人の村落を經過して、丘陵に差しかゝりしが、此丘陵は高さ四百米突なり。道は老哈河に並行し、其の右方を進み行くなり。王府を出發してより、七清里計りの處と十清里計りの地に、各一村落ありしのみ、其の後は全く人家を見ず。物淋しき丘陵の上を進みしが、日暮れては道愈々困難なればとて、第二の村落よりは一層車を早めしも、途中にて日は西山に沒し、闇は次第に追り來りしかば、尚ほ一層車を早め、丘陵の上を西南の間に向ひて一目散に驅けたり。道は單調なる丘陵にして木は一本も無く、只草の生え居るのみ。斯る中に日全く暮れ、四方を辨ぜざるに至りしが、第二の村より四十清里餘の處にて始めて大なる村落を望み、又其の附近處々に村落あるが如かりしも、暗夜の事なれば、之に停まる事もせずに行を續け、遂に第二の村より五十清里計りにして、一村落に到着せり。夜も十時に垂んとする頃なれば、人家は既に門を閉ぢ居れり。

哈喇口道

城廓の如き大家

主人の歡待

溝の水凍る

此の村落は哈喇口道と稱す。村内に金持の酒屋あり。家恰かも城廓の如く、周圍には高き土塀を圍らし、主人の一族及び其の召使等の家屋は其中にあり。夜は其の門を閉づるなり。此の村には支那人のみにて、蒙古人は居らざれども、土地は敖漢王の管轄なり。余等に隨行せる二人の兵士は、此酒屋の門を叩きて之を開かせ、一行其中に入りしが、門内頗る廣く、家も處々にあり。漸くにして酒屋の店に到り、王府より來り今漸く此の地に達せるが、一泊せしめ呉れよと言ひしに、此の家の主人は快く承諾し、余等を別室に案内し、俄かに溫床を奈き、又た夜深なるに拘らず、特に饂飩を打ちて饗應する等歡待大に努む。余等即ち此處に一泊す、此の村の高さは二百六十米突。

要するに今日の道は、王府出發以來王として老哈河沿岸を、經過し來れるなり。

本日の溫度は、朝五十四度、晝七十七度、夜五十九度。

二、赤峰に歸着す

十月三十日。 朝起き出れば酷しく溝の水は凍り居れり。今日は之れより赤峰に歸る日なれば、朝早くより旅裝を整へ、二人の兵士を案内として此家を出發せり。朝になりてよく見るに、此の家は非常に大きく、恰かも一地方の大名の如し。此の家の門を出れば附近は、一筋町の小市街にして、日用品を販ぐ店等あり。

哈喇河

町を出て〻少しく進めば一小河あり。所謂哈喇河にして、老哈河に注ぐものなり。河を渡りてよりは、復た赤土色の丘陵にして、老哈河は此の道の左方を流る。此邊一帶に支那人の村落にして、土地は開墾せられ居れり。之によりて老哈河沿岸の、既に開墾せられ居るを知る可し。又た老哈河の左岸には大なる山連亘せるを見る。單調なる丘陵の上を歩み、幾多の村落を經過して、進む事二十清里餘、五十家子に達せり。此の高さ三百米突。

五十家子

此處にも大なる酒屋あり

西烏珠穆沁の喇嘛僧と語る

五十家子は老哈河沿岸に於ては、少しく大なる村落なり。此の村にも大なる酒屋あり。哈喇口道のものには比較するを得ざれども、此の附近にては大なる家なり。余等即ち此の家に入りて、中食する事となりしが、此家の主人は年齢五十餘、いと快濶なる男にして、余等と種々の話をなせり。此の家にては高粱酒を釀造し居れるが、主人は余等を案内して、其の釀造場を見せしむる等大に歡待せり。

又た此の酒屋の門前に、二三臺の車を置きありしが、此の車を牽き來りしは、西烏珠穆沁の蒙古人にして、悉く喇嘛僧なり。彼等は鹽を賣る爲めに、赤峰附近に行ける歸りなるが、余

英金河畔に出づ

赤峰に到着す

尚氏不在にて要領を得ず

尚氏余等の爲めに土城子に向へり

等の北地より來り、蒙古語を解するを聞き、余等の處に來りて色々の話をなせり。

昼食後余等は愈々赤峰方面に向つて進む。道は暫らく老哈河の沿岸を傳ひ居りしが、轉て英金河畔を傳ふ事となれり。元來此地は、英金河の老哈河に注ぐ附近に位するなり。河畔に出て、よりは、土地愈々開墾せられ居るを見る。而も道は次第に山と山との間を進む事となり、幾多の村落を經過し、五十家子より四十清里計りにして、英金河を渡り赤峰に到着せり。赤峰の事は、此の日記の最初に於て記したれば此處には之を省く。

余等の赤峰に入れる時は、既に火を燈したる頃にして餘程暗かりき。余は隨行の兵士を先に遣はし、豫て懇意にし、又た世話になり居る武官の、尚氏に宿舍の事を依頼せしに、尚氏不在なりとの事にて要頭を得ず。即ち余等自身に、車を衙門に率入れしめて談判を試みしも、尚氏は實際不在なりとて、士官とも思はるゝ人出て來り、余等に言て曰く、尚氏は先日車を率ゐ、大人等の爲に土城子に向へり。其は過日土城子より一人の兵士來り、大人等は車もなく旅行大に不便なりとの書面を持參し、又た大人より尚氏に托し、北京の公使館に宛たる書狀もありしかば、大人等は大に困難し居るならんと思ひ、尚氏は直ちに車を整へ、大人等の爲めに車を率ゐ、食物、果物等を用意して、尚氏自身土城子に向へるに、大人等の斯く無事此の地

赤峰滯在

赤峰出發

に到着せられしは祝着の至りなり。斯る次第にて尚氏不在なれば、余代りて宿舍を周旋せんとて、彼は自身余等を案内せるも、一二の宿屋は、余等を宿泊せしむるを背ぜず、漸くにして或る一軒の宿屋に泊る事となれり。

本日の溫度は華四十六度。

十月三十一日。 赤峰滯在

赤峰は之迄屢々述べたる如く、殆んど余等の第二の故郷とも云ふ可き處にして、知人も多ければ、今日は其の人々の訪問を受け、又た郵便を差出す等の事に一日を費せり。此の地の高さは三百六十米突なり。

第二十四　赤峰より朝陽

一、巴奇爾阿嶺を越ゆ

十一月一日。 赤峰より車一臺を雇ひて、早朝出發す道は朝陽街道にして、即ち東南に向ひ、主として丘陵の上を進みしが、三十五清里計りにして或る村落に達し、此處に下車して食事を取れり。此の地の高さ四百二十米突。

老哈河を渡る

美里河郷

黒水村

遼の中京と赤峯との中間

中食後此村を出發し、十五清里計りにして老哈河に達せり。此の邊の老哈河は、此の時水量極めて尠なかりしも、河幅は中々廣く、渡舟にて兩岸の間を往來し居れり。老哈河は此の邊にて高さ三百二十米突あり。余等即ち河を渡り、其の左岸に沿ひて進みしが、更に行く事三十五清里計りにして、美里河郷に到着せり。此は相當に大なる村落なり。

此の附近は一帶の丘陵にして、土質は赤色を帶び、畑は能く耕されて居るを見る。單調なる丘陵の處々に村落あるのみ。道の兩方面には山を望む。斯る處を繰返し〳〵赤峰より一百十清里、日西山に沒し火を燈さんとする頃、漸く黒水に達す。此處も亦相當の村にして、旅舍もあり、余等は此の旅舍に一泊する事とせり。此の地の高さ三百二十米突。

此の日經過し來れるは、悉く支那人の村落にして、開墾せられ居る畑も亦彼等のものなり。而も土地は西翁牛特王の管轄に屬す。

此の黒水なる地名は、元蒙古語より來れるが如し。蒙古語の所謂ハラオッソとは此義なり。又た余等の宿泊せる旅舍の主人の語る處に據れば、遼の中京の在る處即ち白塔子迄は、此處より一百二十清里なりとの事なれば、此の地より赤峰迄と白塔子迄との距離は、殆んど大差なきを知る可し。

土器陶器の破片

陶器の破片を利用せる玩具

モンミン營子

遼時代の古城

斜河

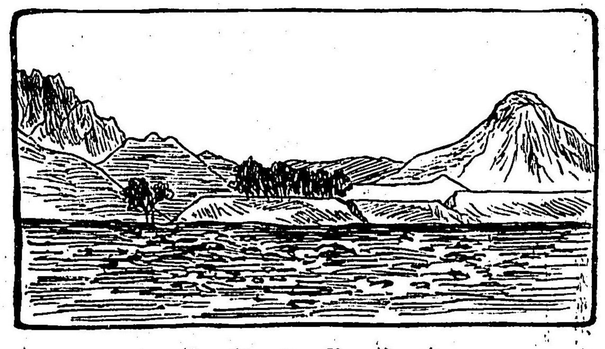
本日の溫度は、朝五十九度、昼七十二度。

十一月二日。 早朝黒水を出發す。道は次第に丘陵を登る事となれるが、其の最高處は五百八十米突にして、黒水より高き事二百六十米突なり。又た此の丘陵を登る途中にて、土器陶器等の破片の散亂せるを見たり。之等の土器は、何れも遼時代のものなるが如く、其の中に、小供の玩具に用ひしものか、不用の陶器を、小さく圓形に打缺きたるものを發見せり。斯かる廢物の陶器を圓く作りて、小兒の玩具にするの風習は、他に於ても存するものにして、之等に據るも、斯る遊びの當時の小兒の間に行はれたるを知らん。

此の丘陵は赤色を呈し、其の上は廣漠たる平原をなし居れり。之を進む事四十清里計りにして、モンミン營子に到着し、此處に下車して中食する事となれり。此の地の高さは五百二十米突。

モンミン營子を出發してより、暫らく進めば丘陵の上に、一大土城の在るを見たり。此の邊は最も要害の地にして、城の在る處は高臺をなし、其の東方はダラ〳〵坂となり居るが、余の從來の經驗に據りて考ふるに、遼時代の城たる事明なり。而して城の在る丘陵の下には河流あり、此は斜河と稱するものなるが、六十清里計りにして老哈河に合すと云ふ。此の土城の如

城内の遺物



土城子の古城

何に要害の地を占ひるかは、以上說く處に據りて推知するを得ん。城は現今にては高さ一間半計り、土を積みたるものにして、其厚さは七歩計りなり。現存の城壁は西と南は完全なるも、東は半ば存するのみ、北側は全く無し。城壁の周圍は二清里計りもあらん。余は此處に下車して、遺物なきかと注意せしに、城内の南側には今尙ほ高臺等の跡を存し、又た陶器の破片等は處々に散亂し居れり。余は其の中より石臼の破片、及び陶器土器等の破片を採集せしが、又た鼠色の素燒土器を發見し、能く〳〵之を注意せしに、其の表面には、其の製造に當り、未だ柔かき時に木片等を用ひて畫けるが如き、光澤ある菲盤形、横線等あり。之れ東胡の古き時代の土器の進歩せるものにして、其の該民族と互に連絡あるを知る可し。此處にても亦土器の壞れたるを利用して、圓形に作り小供の玩具に似せるものを拾へり。

海山阜

余等は土城に就て種々の調査を爲せる後ち此處を出發し、海山阜に到りて宿泊する事となれり。此の地の高さ標高五百二十米突。

本日の溫度は朝五十二度、晝六十八度、夜五十八度。

潮洛胡洞嶺

十一月三日。 海山阜を出發し、暫らくにして高き峰を越ゆる事となれり。之れ潮洛胡洞嶺なり。余等は此を登りかけ、車を行るに頗る困難しつゝある折柄、恰かも十數人の蒙古人、各々車に物を載せて、此の峰を上らんとするに會せしが、彼等の或者は、余等の車の後押等をなして助力せり。彼等は喀喇沁中旗の人にして、余等の蒙古語を解するを非常に驚けり。彼等は初め支那人なりと稱し居りしが、次第に詞を交ゆるに及び、其の蒙古人なるを言ひ色々の談話を試みたり。斯くて漸く山頂に達せしが、其の高さ六百米突にして、之迄に於て最も高し。又た山上に於ては非常に寒さを感ぜり。而して道は之より下りとなり、余等は東方に向つて山を下る。今朝出發以來四十五清里にして、盤馬臺に達す。此の地の高さ三百米突なるを以て、山頂より此處迄三百米突を下れるなり。以て潮洛胡洞嶺の如何に高きかを知る可し。

蒙古人余等の車の後押を爲す

都馬臺

余等は此處に下車して中食する事とせり。

ローシャン河

士器及人頭骨羊肩骨を發見す

西清溝梁

元朝の碑文

馬迷水

畫仮後猶馬臺を出發し、十清里計りにして河岸に達せり。此邊に到りては地勢全く一變し、前方には岩石の高き山脈を控へ、河は其の下を流れ居るなり。此の河は老哈河の上流にしてローシャン河と稱す。蒙古語にてはマジンコルと云ふ。河床の高さは二百六十米突、又た此の附近に十三オボあり。地は喀喇沁中旗に屬す。

河の附近の丘陵に於て、其の獵れたる處に、土器の破片の包含せらるゝを見たれば、即ち下車して採集せるに、何れも素燒の厚手のものにして、波形及び刷毛目形の模樣等を附せり。即ち其の種類は赤峰附近、英金河畔に存するものに似たり。又た之と共に人頭骨の一小破片、羊の肩骨の破片とも思はるゝものも混り居れり。之等の材料は老哈河上流に於ける、東胡民族の研究に於ては、尤も注意すべき材料なりと思はる。

之より復び道は上りとなり、西清溝梁を上りて遂に其の山頂に達せるに、バロメートルは四百五十米突を示せり。此處には山神の一小祠あり。又た元朝の元統三年、此の梁を開きし時の古き碑文の建ち居るあり。之によりて此の峠の開修は元時代なるを知れり。道開かれてさへ斯る有樣なれば、其の以前の事も想像するに堪ゆ。之より東方に向ひて山を下り、十清里計りにして馬迷水に到着せり。此の地の高さは二百三十米突。山頂より二百二十米突を下れるなり。

朝陽縣に入る

巴奇爾阿嶺

老哈大凌兩河の分水嶺

馬迷水の村は既に朝陽縣にして赤峰縣に非ず。之等の事實に據りて考ふれば、今日越え來れる、潮洛朝洞嶺及び西清溝梁は、此の附近を走る一大分水嶺なるを知る可し。彼の地圖の上に見ゆる巴奇爾阿嶺と稱するは、即ち此の山脈を稱するならん。而して之等の分水嶺の西方は、老哈河の流域にして、其の以東は既に老哈河の流域と遠かり、朝陽方面に出で更に渤海に注ぐ處の、凌河の流域となり居るなり。されば此の分水嶺は、地理學上最も注意すべきものに屬す。

馬迷水の村には旅舍無かりしかば、或る紳士の家に請ひて一泊する事となれり。

本日の溫度は朝四十一度、晝六十度、夜五十三度。

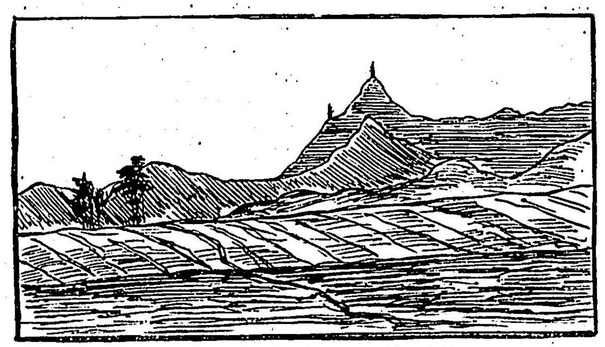
二、朝陽に入る

土城子

十一月四日。 早朝馬迷水を出發し、全く山と山との間を進む。兩山の間に一河あり、之れ西清溝なり。此の時は水無かりしも、一朝雨期に際會すれば、水俄かに出づるものゝ如し。此の河は大凌河に注ぐものなるが、此處は即ち大凌河の分水嶺なり。斯る山間の道を進む事十五清里計りにして、土城子に到着す。

土城の調査

丘陵上の遺物



黄金店附近より朝陽方面を望む

土城子は大なる村落にして、地はよく耕され居れり、此の地に又た土城あり。土城子の名も之より起れるならん。今尚ほ城壁は明かに認むるを得れども、現存するは南西の兩面にして、北東二面は僅かに殘るのみ。城の位置は東西南北に正しく面す。余等は城内に入りて調査せるに、城内亦既に開墾せられ居る事とて、何等の得る處無かりしも、其の形狀等に見て明かに遼時代のものたるを知れり。古城の高さ百七十米突なるが、此處に立ちて今余等の經過し來れる方面を顧みるに、非常に高き岩石の山聳を、大凌河流域と老哈河流域との、分水嶺を爲す樣明かに認めらる。

土城子を出發して再び丘陵の上に車を進む。丘陵の頽れには、處々に於て例の古土器の挿まり居るを

黄金店

遠かに朝陽の古塔を望む

諸種の遺物

見る。之を抜き取りて注視せるに、昨日來處々に見たるものと同じく、赤褐色を帶べる厚手の土器にして、網代形を畫ける模樣等を附せり。又た石器製造に用ひたるものゝ破片、骨片等をも得たるが、此の骨片の先は鋭利になり居るに見るに、往時之を以て物を突く用に供せしを想はしむ。之等の材料によりて、此の地には古くより住民ありしを證せらる。之亦大凌河流域に於ける、東胡の研究上最も重要なるものなり。

余等は尚ほも行を續け、出發以來三十五清里計りにして黄金店に達す。土城子よりは二十餘清里なり。此の村には宿舍もありしかば、余等は即ち下車して中食を取れり。

中食後此の地を出發し、尚ほも東に向つて進む中に、前面に當りて高き岩山を見たり。而して其の山上に、古塔の二つ建てられ居るを幽かに望みしが、此の塔の下方は有名なる朝陽なり。

黄金店出發以來道は次第に廣くなれり。五六清里進める頃、道の傍に古き瓦の破片、無數に集まり居るを見たり。之れ畑の中より掘りたるものにして、遼時代の屋根瓦なるが如し。思ふに此の附近に、寺か何かの建物ありたるならん。又た此の附近にて、僅かに刃の一小部分破損せるのみ、殆んど完全なる石斧を得たり。又た黄金店より十清里計り來れる處にて、丘陵の頽

れに土器の破片を存するあり。之を拾ひ見たるに、午前に得たるものと同一なり。

尙ほ進み行くに隨ひ、西清溝は次第に大河となり來れり。余等は此の河岸に沿ひて進み、廣漠たる高原を過ぎ、出發以來七十清里にして、朝陽に達し或る旅舍に入りしが、時に午後三時頃にして、日も未だ高く、且つ朝陽には研究すべきもの多ければ、種々之が調査を爲す。即ち此の地に殘れる古き塔等を調べ、其の寫眞等をも撮影し、今夜は此地の一旅舍に宿泊する事となれり。

朝陽に入る

朝陽の調査

朝陽は標高百六十米突、前に岩石の山を控へたる廣き高原に位し、其の傍を大凌河流れ居れり。市街の兩端には二個の古き塔あり。何れも正方形をなし、滿洲蒙古等に存するものとは非常に其の趣を異にせり。蓋し唐代のものならん、此の地の人は之を南塔北塔と稱せり。又た前方山上にも塔あり。即ち三つの古塔あるを以て、或は朝陽の事を三座塔とも稱す。三座塔は蒙古人の所謂コルバンサバラガ、即ち三塔と云ふ事より來れる名稱なり。朝陽は元土默特蒙古の土地にして、今尙ほ其の管轄なれども、今日其の市街には蒙古人一人も住まず、全く支那人の町なり。管轄は熱河に屬し朝陽縣を此の地に置けり。町は廣く人口は約二萬許あり。商業も相當に殷盛にして、此の附近に於ける需要供給を充し居れり。此の町は元三座塔と稱せしを、後縣を置かれてより今の朝陽に改めたるなり。現今は此處には新に訓練せられたる、兵隊の駐屯するありて中々威勢よし。又た町の端に喇嘛廟ありて、此處には土默特の蒙古人居れり。

蒙古人一人も無し

本日の溫度は朝五十五度。

第二十五　朝陽より錦州北京

一、凌河流域

朝陽出發

大凌河を渡る

古塔

チャンチャ營子

扛牛營子

十一月五日。 朝未き頃朝陽の宿を出發し、十清里許りにして始めて大凌河畔に達せり。河は水多く渡舟を用ひ居れり。余等も此の渡舟によりて對岸に渡り、其より河岸に沿ひて進みしが、三十清里許りの處にて、前岸に壞れたる古塔の在るを見たり。支那人は此の地をチャンチャ營子と呼べり。此の邊景色最も佳し。朝陽より四十清里許りにして扛牛營子に達し、下車して中食を取れり。

扛牛營子を出發してよりは、大凌河の支流に沿ひて次第に上り行き、最高百五十米突の處迄達せり。途中道の左側に一の喇嘛廟あり。又た此の附近にて非常に破損せる古塔を見たり。

土默特の喇嘛僧と同行す

大凌河畔の土器

道は之より漸く下りとなり、扛牛營子より三十清里計りにして、巴圖營子に到着す。此處は一小市街を形成し、市街の周圍は土壁を以て圍み、其の中には五六十の商家あり。又た大なる廟もあり、町の前には一河流る。

余等の此の地に達せる時、馬車に乘りて余等と同一方向に進む、土默特蒙古人に會し、彼と詞を交へたるに、其は若き喇嘛僧と其母とにして、當時北京に大喇嘛來り居る故、之に喜錢を納むる爲に行くなりと語れり。彼はよく話す男にして、錦州迄余等と同行せんと云ひ、汽車に乘るは恐ろしけれど、外國人と一緒なれば心强しとて非常に喜び居れり。余等は又彼によりて土默特の樣子を聞くを得たり。

蒙古語にて巴圖營子を、トブルックと云ふと彼は語れり。之に依りて考ふるに、巴圖の名の蒙古語より來れるものたる非明かなり。此の邊は最も要害の地にして、巴圖營子の町は丘陵を北にし、南に河を控へ居れり。余等は之より此の河を上り行く事となりしが、六七清里計り進めるの時、河畔の丘陵に例の古き時代の、土器の挿まり居るを發見し、之を拔き取り見たるに、薄手のものにして、日本のイハヒベ土器の如く、其の形狀よりすれば、潢河方面のものに似たり。即ち突つつき模樣、幾何學的模樣等あり。此處より三四清里の處にても、亦此種の土器を見しが、其の中に瓶の頭の部分とも覺しきものあり。之に依りて往時此の河畔に在りし住民は、潢河方面に居住せるものと、大差なきものたるを知る。即ち東胡の古き時代のものなり。

長柵

この間の山上諸所に、烽火臺の如きものを認む。而かも是等は列をなして存在するが如し。この邊まさしく彼の長柵のある場所ならん。

新開梁

余等の今上り行く河は、大凌河に注ぐものなるが、之れ一の大凌河の分水嶺なり。此の沿岸には、今は既に落葉して枯木になり居るも、樹木は處々に在り。此の峠をシンカイリアン（新開梁？）と稱し、其の最高處にて百六十米突なり。之を下れば又た一小溪流あり。此の流れに沿ひ、月を踏みて進みしが、朝陽より一百清里にして、夜半一村落に達せり。此の時余の妻は急に腹痛を覺え來り、前後を忘却する程に苦しめり。余は殆んど終夜を妻の病氣の看病と、小供の世話とに送れり。

妻の急病

此處は山中の一村なるが、余等の宿泊せる旅舍には各部屋に客あり。余等の隣室には途中同行し來れる、喇嘛僧の母子宿し居れり。

本日の溫度は朝四十五度、晝六十一度。夜五十度。

二、支那旅宿の狀態

妻の全快

十一月六日。昨夜の模樣にては余の妻は、到底旅行を繼續するを得ざる可しと思ひしに、本日に至りて全快せしかば大に安心せり。馬夫今日の道は非常に遠しと云ひしかば、即ち未明火を燈して此の村を出發し、小凌河の沿岸を南に向ひて進み、二十清里計りにして鎮家臺に達せり。余等は此處にて始めて小凌河の大なるに驚けり。之を渡り其の沿岸を進み、二十清里計りにして杖子店に到着し、此處に下車して中食す。此の村の入口に大なる丘陵あり。余等は其の高處にて石斧一個を拾へり。之に見るも小凌河流域にも、古き時代に石器を用ひたる、アボリジンスの居住せるを知らん。

未明に出發す

小凌河

杖子店

小凌河畔の石器

杖子店は小凌河畔の一小村落なり。河畔に二個の石碑建てられ居るを見る。之には嘉慶年間此の河に石橋を架せる事を記せり。即ち今は石橋なけれども、其時には之れ有りしものと思はる。碑には流河溝石橋と記せるに見れば、元此の河を流河溝と稱せしならん、此の河の小凌河上流なるは勿論なり。

流河溝石橋

此處を出發してよりは、尙ほも河に沿ひて進む程に土地益々廣く、山と山とは次第に相離るゝ樣になれるが、之れ即ち錦州附近に到着せる爲めなり。余等は幾多の村落を經過せるが、此の間よく耕され、不用の地は殆んど無き位なり。斯くして午後五時頃小凌河を渡り、錦州城に到着せり。余等久しく蒙古の地及び支那人の村落、小市街のみを見慣れたる眼に、錦州城を見て殆んど別世界に入れるの感あり。其の入口にて既に往來の頻繁なるに驚き、次いて城內に入るに及びては、人馬の絡繹たるに驚嘆せり。

錦州に入る

文明的旅舍

余等は錦州より鐵道にて北京に歸る事なれば、停車場附近の旅舍に投ぜしが、此の旅舍は、新たに停車場附近に設けられたるものなれば、此の附近にて最も文明的なるものなり。即ち各室は一つ宛別になり居り、室內美しく、食事も亦宜し。此の家の主人は、吾が店は米の飯を付けて幾千なりと云へり。此は少しく不思議の感を起さしめれども、此處より奧地にては日常米を用ふる事なきを以て、旅舍にても米飯を用ふるは非常に贅澤に屬するなり。此家の主人の言も亦此意味に外ならず。此の附近の宿屋にては、室料以外に食事二度にて二圓銀貨一枚にして、食物は良き品を用ふ。之に據りて此の地方の旅宿の狀態を知るを得べし。

米飯付にて幾何の宿料

錦州旅舍の狀態

此の日の溫度は朝五十三度、晝六十五度。

三、錦州より北京

錦州滯見

十一月七日。錦州滯在。

早朝北京の服部博士に、余等の此の地に到着せるを打電せり。今日は一日錦州城内を見物せんとて、余等は馬車を整へて市中を巡り、此の地に存する古塔等を見たり。

錦州は城壁の中に在る市街にして、其の城壁は長方形をなし、南北九町東西六町あり。其の南門を永安と云ひ北門を鎮北と稱す。人口約五萬以上、商業盛なり。鐵道開通の結果將來に於て益々發達の見込あり。其の地勢、前には渤海灣を控へ、又た滿洲蒙古北京間の要路に當るを以て、往時より著名なる所なり。

錦州の古塔

大廣濟寺の碑文

錦州府の西方城内に一の塔あり。こは十三重八角にして、其の傍に大廣濟寺と稱する寺あり。此の寺の中に重修大廣濟寺記と書せる碑文を存す。之に盛京通志の文を引用して曰く、此處は昔日の錦郡にして、唐朝大廣濟寺ありて方塔を建つ、高さ十三層三十九丈ありしが、久しく破壞せしを、明朝嘉靖十一年に至り重修せり云々、

と記せり、又た此の碑の下に一の古碑の横はるあり。其の文字は全く磨滅し、一字も讀み得ざるを以て、之亦明の嘉靖年間に建てたるものか否かも明かならず。兎に角此の錦州の古塔は頗る大なるものにして、遼か金かの時代のものと思はる。

錦州出發

余等は種々の調査を爲し、旅舍に歸りて一夜を送れり。

本日の溫度は朝四十五度、晝六十三度。

十一月八日。錦州にての調査も總て終りしかば、愈々北京に向はんと、汽車によりて此地を出發し、車中より附近の地勢等を觀望せり。

本日の溫度は朝四十三度、晝五十三度。

北京到着

扶桑館に入る

十一月九日。午前北京に着車せり。余等は直ちに北京街上なる日本旅舍扶桑館に入る。旅館にては此怪しげなる、親子三人が旅に疲れたる樣の衣は破れ汚つき、顏は日焦げと汚に、一入人相惡しく見えしと覺しく、店員は一瞥をくれたるのみにして、室に導かんともせず。

初めて入浴

止むを得ず此方より鳥居なりと云ひ出てしより、初めて皆々打驚き、今日しも歸へり來られしかとて、大に待遇せられ、年を經て此處に美しき湯を溶み、打寛ろぎて日本料理の膳に向ひ、溫く柔らかき臥戸に入り、疲れたる身心を始めて安らかに横たへぬ。

服部博士邸に入る

日ならず服部博士邸より御迎へを受け、船の出航日まで殘る二三日を博士邸に送り、總荷

作りに毎日多忙を極めたり。

蒙古旅行 終

本篇記載の地名讀方

括弧をなせる地名は蒙古語なり。蒙古語、滿洲語よりなれる地名と云くとも、今日殆んど漢名となれるが如きものは、今之を漢音地名中に入れたり。

自第一—至第二

喀喇沁 (Khárachin)
左旗 (Chégun)
右旗 (Tomdo)
中旗 (Boroghan)
赤峰 Ch'ih-Fêng (Olan hatai)

第三

揚家營子 Yang-Chia-Ying-T'zü
札嚕特 (Charot)
白塔西溝 Pai-Ta-Hsi-Kou
小嶺子 Hsiao-Ling-T'zü
木匠營子 Mu-Chiang-Ying-T'zü
上瓦房 Shang-Wa-Fang
王爺店 Wang-Yeh-Tien
廟前營子 Miao-Ch'ien-Ying-T'zü
黑里河 Hei-li-Hé
三塊留周 San-K'uai-Liu-Chou
佑格舖 I-ké-P'u
頭道營子 T'ou-Tao-Ying-T'zü
二道營子 Êr-Tao-Ying-T'zü

附錄

石虎 Shih-Hu

老爺廟 Lao-Yeh-Miao

八道子嶺 Pa-Tao-T'zŭ-Ling

福壽溝 Fu-Shou-Kou

西泉 Hsi-Ch'üan

金銘堡 Chin-Ming-P'u

八里汗腦子 Pa-Li-Han-T'ieng-T'zŭ

札蘭營子 Cha-Lan-Ying-T'zŭ

石頭老爺廟 Shih-T'ou-Lao-Yeh-Miao

三間營子 San-Chien-Ying-T'zŭ

和碩金營子 Hê-Shuo-Chin-Ying-T'zŭ

興龍街 Hsing-Lung-Chieh

押頭河 Ya-T'ou-Hê

西橋頭 Hsi-Chiao-T'ou

孟稱城口 Mêng-Ch'êng-Kou

上營子 Shang-Ying-T'zŭ

大坦梁 Ta-T'an-Liang

喀喇河 K'ê-Nao-Hê

上燒鍋 Shang-Shao-Kuo

梁地 Liang-Ti

塘房營子 T'ang-Fang-Ying-T'zŭ

毛家臥鋪 Mao-Chia-Wo-P'u

三間井 San-Yen-Ching

白第四十一表第五

招蘇河 Chao-Su-Hê

興隆莊 Hsing-Lung-Chuang

劉家營子 Liu-Chia-Ying-T'zŭ

普羅科河 Pu-Lo-K'ê-Hê

小河營子 Hsiao-Hê-Ying-T'zŭ

廣義公 Kuang-I-Kung

國公攻 Kuo-Kung-Fên

烏丹城 Wu-Tan-Chêng

大黑山 Ta-Hei-Shan

小黑山 Hsiao-Hei-Shan

白第四十一表第七

阿哈科爾沁 (Ar-Khorchin)

烏珠穆沁 (Uchimuchin)

克什克腾 (Geshikten)

白塔子 Pai-T'a-Pai-T'a-T'zŭ (Changhan Sabaragha)

喀陵 Ch'ing-Ling

臨潢 Ling-Huang

兀良哈 (Wu-Lang-Ha)

結諾河 Ch'ao-No-Hê (Chono oso)

波羅城 Po-Lo-Ch'êng (Boro hoton)

昭烏達 (Chao-oda)

榆村 Yü-T'sun

白城 Pai-Ch'êng (Chaghan hoton)

白第四十一表第十一

車臣汗 (Tsetsen khan)

札哈特 (Charot)

小塔子 Hsiao-T'a-T'zŭ

小梁子 Hsiao-Liang-T'zŭ

科爾沁 (Khorchin)

錫林郭勒 (Siling Gol)

達賴淖爾 (Talaihan)

喀爾喀蒙古 (Khalka Mongol)
巴爾喀 (Barha)
塔 湖 (Sabunghan nor)
茅金坝底 Mao-Chin-Chü-Ti
兩家兒 Liang-Chia-Êr
熱 河 Jé-Hé
灤河 Luan-Hé
灤平縣 Luan-P'ing-Hsien
三道梁 San-Tao-Liang

自第十二—至第十五

奈曼 (Naiman)
札什倫廟 (Chashirin som)
布達拉廟 (Hudara som)
滿子坟 Man-T'zü-Fén

陳家店 Ch'en-Chia-Tien
鞍匠屯 An-Chiang-T'un
石匣 Shih-Hsia
密雲縣 Mi-Yün-Hsien
大落山庄 Ta-La-Shan-Chuang
牛梁山 Niu-Liang-Shan
孫河 Sun-Hé

第十五

渭河 Ch'ing-Hé
宣化府 Hsüan-Hua-Fu
居庸關 Chü-Yung-Kuan
八達嶺 Pa-Ta-Ling
岔道 Ch'a-Tao
懷來縣 Huai-Lai-Hsien

沙河鎮 Sha-Hé-Chén
胡 梁 橋 Cho-Ch'ung-Chiao
南口 Nan-K'ou
新保安 Hsin-Pao-An
上 華 園 Shang-Hua-Yüan
張家口 Chang-Chia-K'ou

自第十六—至第十八

多倫諾爾 (Dolon nor)
土城子 T'u-Ch'eng-T'zü
白廟子 Pai-Miao-T'zü
板身兒 P'an-Shên-Êr
塩鄂博 Yen-Obo
燈籠樹 Teng-Lung-Shu
黑土窪 Hei-T'u-Wa

邊 橋 P'ien-Ch'iang
經棚 Ching-P'eng (Bero hoton)
上都 Shang-Tou
白 城 Pai-Ch'eng
阿巴嘎 (Abagha)
大豪賴 Ta-Hao-Lai
橋頭營子 Chiao-T'ou-Ying-T'zü
白岔營子 Pai-Ch'a-Ying-T'zü
小河子 Hsiao-Hé-T'zü
巴林 (Barin)

自第十九—至第二十五

大板身 Ta-P'an-Shên
老哈河 (Lohan Muren 或 Lohan kol)
狼水 Lang-Shui

敖漢(Aoshan)
五十家子 Wu-Shih-Chia-Tzŭ
哈喇口道 Ha-La-K'ou-Tao
大梁河 Ta-Liang-Hô
朝陽 Chao-Yang
巴奇爾阿嶺 Pa-Chi-Er-Aling
義里河鄉 Mi-Li-Hô-Ch'ing
海山阜 Hai-Shan-K'ang
潮洛胡倫嶺 Ch'ao-Lô-Hu-T'ung-Ling
駕馬臺 Cha-Ma-T'ai
馬迷水 Ma-Mi-Shui
黄金店 Huang-Chin-Tien
牝牛營子 P'in-Niu-Ying-T'zŭ
巴圖營子 Pa-T'u-Ying-T'zŭ
小梁河 Hsiao-Ling-Hô
杖子店 Chang-T'zŭ-Tien

附言、卷頭に添へたる地圖中、蒙古以外の部分は比較的里程大に延長せり、こは余の不注意より來りしものなれば、再版の際、訂正すべし。

——終——

溫度表（テント內）

月日	地名	午前八時 華氏	午前八時	正午十二時 華氏	正午十二時	午後八時 華氏	午後八時
三月十五日	劉家營子	一〇度		一一度強		一一度	
三月十六日	國公坟	四度		六度			
三月十七日	國公坟附近	〇、九度					
三月十八日	東翁牛特王府附近	一度				五度	
三月十九日	同	〇、三度		二度		八度	
三月二十日	同	〇、二度		三度			
三月二十一日	同	三度		六度		一一度	
三月二十二日	同	九度		一一度		一五度	
三月二十三日	同	八度		一二度		一二度	
三月二十四日	同	一一度強		一二度		一一度強	
三月二十五日	王府—チャガンマンハ	一一度					

溫度表

三月二十六日	チヤガンマンハ	〇度		一三度強
三月二十七日	チヤガンマンハ附近	一二度	一三度	二一度
三月二十八日				
三月二十九日	ホルヒンソム—トロガイ、ス、アイラ	七度	二一度	七度
三月三十日	トロガイ、ス、アイラ—コクスット	四度	一六度	一三度
三月三十一日	コクスット附近	一〇度	一二度	一四度
四月一日	コクスット	九度	一二度	
四月二日	コクスット附近	一九度	一四度	
四月三日	コクスット	一一度	一三度	一五度
四月四日	コクスット附近	八度		
四月五日	大巴林潢河々畔（シヤムレン）	四度	七度	
四月六日	ホトクンアイラ附近	七度	一五度	
四月七日	トロガイヌアラヌアイラ附近	八度	一三度	一三度弱
四月八日	同			

四月九日	ソストノトルヌアイラ附近	一一度	一八度	
四月十日	大巴林王府附近	四度		
四月十一日	大巴林王府	六度	一二度	八度
四月十二日	大巴林王府附近	九度		
四月十三日	チヤガンムレン流域	一二度	一六度	
四月十四日	小巴林タービンアイラ附近		二三度	
四月十五日	チヤガンサバラガ附近	一七度		
四月十六日	同			
四月十七日	同	一五度		
四月十八日	オッソイフ附近	一八度	二三度	
四月十九日	小巴林王府附近	一九度	二〇度	
四月二十日	小巴林王府	二一度		
四月二十一日	オーランウルグ附近	一九度	二〇度	
四月二十二日	オーランウルグ—遼上京	二四度	二〇度	一六度
				一六度

四月二十三日	遼上京			
四月二十四日				
四月二十五日				
四月二十六日				
四月二十七日	阿嚕科爾沁王府附近	一〇度	一一度	五度 七度
四月二十八日	王府—フブアイラ	一五度	二四度	
四月二十九日	白城附近	一六度	二六度	
四月三十日	モントアイラ—ガブチンソム	一五度	二一度	
五月一日	ガブチンソム—フングルテ		一四度	
五月二日	興安嶺山頂附近			
五月三日	フンルックアイラ	六度	一一度	
五月四日	同	一三度	一八度	
五月五日		六度		
五月六日	西烏珠穆沁スリドルンアイラ附近	八度	一七度	

五月七日				
五月八日	ホトカスアイラ附近	一五度	一七度	
五月九日	バインブルックスアイラ附近	一五度	一七度	
五月十日	ゴルギン河畔	一二度	一一度	
五月十一日				
五月十二日	ボンボテ附近	八度	一六度	
五月十三日	王府附近	八度	一六度	
五月十四日	ブルテノール附近	一四度	二二度	
五月十五日	ブルテ—チヤチルンホトカ	一七度	二一度	
五月十六日	チヤチルンホトカ—タスグンスアイラ	一二度強	一五度	四度
五月十七日	臨湖附近		二一度	一四度
五月十八日	スフテオーラ附近	一四度	一九度	一四度
五月十九日	モトンホトカ附近	一四度	二六度	
五月二十日	ビチクテンホラ附近	一五度	二一度	一八度

五月二十一日	ピチクテンホラ附近	一五度		
五月二十二日	サーメン附近	八度	一八度	一二度
五月二十三日	西烏珠穆沁ー外蒙古境界	一一度	二八度	
五月二十四日	外蒙古喀爾喀ハイラソタイ附近	一九度	二七度	二三度
五月二十五日	ツルゲホトカ附近	二五度	二〇度	一八度
五月二十六日	ハヤリエシ附近	一三度	一八度	一七度
五月二十七日	喀爾喀王府附近	一一度	二二度	
九月十四日	チャハル蒙古		六〇度	六〇度
九月十五日	燈籠樹附近	七〇度		
九月十六日	山丹河附近	五〇度	五一度	
九月十七日	ハフチョラ村			五五度
九月十八日	同	五五度		
九月十九日	多倫諾爾	五一度	五三度	五二度
九月二十日				

九月二十一日	上都河畔		六九度	
九月二十二日	同	三三度		
九月二十三日	インチャインヅ	四三度	五八度	
九月二十四日				
九月二十五日	克什克騰蒙古		七二度	七〇度
九月二十六日	經棚附近		六二度	六四度
九月二十七日	ダライノール湖附近		六二度	五八度
九月二十八日	ダライノール湖	五八度		
九月二十九日	同	四四度	六五度	五六度
九月三十日				
十月一日		四四度		
十月二日	經棚	四八度	六九度	五八度
十月三日	同	五〇度	六八度	
十月四日	大豪頼附近	六三度	六七度	六〇度

十月五日	潢河上源地	五八度	六八度	
十月六日	土城子附近	六三度	七三度	
十月七日	土城子	五二度	七七度	
十月八日	同	五三度	六三度	
十月九日	同	六三度	七〇度	
十月十日	同		六四度	
十月十一日	同	五三度	六一度	
十月十二日	同	五六度	六三度	
十月十三日	同	五三度	五六度	
十月十四日	土城子—小河子	五五度	五六度	
十月十五日	シラムレン河畔巴林石橋	五五度	五六度	
十月十六日	大板身附近	五八度	五六度	
十月十七日	大板身附近チャガンウス	五七度	五四度	五八度
十月十八日	小巴林王府附近	五七度	七五度	

十月十九日	ウルヂムレン河—阿嚕科爾沁王府	五〇度		
十月二十日	王府—オーハリン河畔	五四度	七六度	
十月二十一日	狼水附近	四六度	七〇度	
十月二十二日	潢河々畔	四六度	六六度	
十月二十三日	奈曼、老哈河畔	五二度	六二度	
十月二十四日	オムンナムサ附近	六〇度	六〇度	
十月二十五日	奈曼王府附近	五六度	五四度	
十月二十六日	王府—エリンソム	五四度	七七度	五九度
十月二十七日	エリヒンソム附近	四六度	六〇度	
十月二十八日	老哈河畔—敖漢王府	五四度	六六度	
十月二十九日	王府—哈喇口道	五六度	七七度	
十月三十日	五十家子附近	五四度	六〇度	
十月三十一日		五九度	七二度	
十一月一日	赤峯附近		七五度	

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
同	八	童語	童語	二四	一	黑水—海山早	黑水—海山早
二	九	府王	王府	二六	八	十一月三日	十一月三日
二	七	癸民族	奚民族	二七	七	海山早—馬迷水	海山早—馬迷水
二	八	喀喇心	喀喇沁	二八	三	十一月四日	十一月四日
二	九	此途中にに	此途中に	二九	七	朝陽附近	朝陽附近
二	四	王爺府	王爺廟	三〇	七	十一月五日	十一月五日
二	三	阿哨爾沁	阿哨科爾沁	三一	二	朝陽—新開梁	朝陽—新開梁
二	四	石虎に趣ける	石虎に赴ける	三二	二	十一月六日	十一月六日
二	五	古羅科河	卜羅科河	三三	七	新開梁—錦州	新開梁—錦州
二	四	彼の自家姓	彼の百家姓	三四	二	十一月七日	十一月七日
二	六	國公龍	國公攻	三五	二	錦州	錦州
二	二	古器陶器	古陶器等	三六	二	十一月八日	十一月八日
二	一	オルドル	オンドル	三七	一	同	同
二	八	土砂	砂土	三八	五	五二度	五二度
二	五	人牛貝	八手貝	三九	六	六八度	六八度
二	八	濱水石橋を沈む	濱水石橋を望む	四〇	一	五六度	五八度
三	三	宋大中旅符九年	宋大中祥符九年	四一	六	六〇度	六〇度
三	九	牛馬車	牛車	四二	五	五度	五三度
三	八	チヤンガン	チヤンガン	四三	五	五三度	五一度
同	一	八七	同	四四	五	六五度	六〇度
同	六	八九	同	四五	六	六三度	六三度
同	七	八八	同	四六	三	五三度	五三度
同	一	八七—三	契丹の旅行券	四七	一	鳥珠穆沁の役人は	阿哨科爾沁の役人は
同	八	初めて雨に合ふ	初めて雨に會ふ	同	三	此の村にり	此の村より
三	七	十三オボ	十三オボ	四八	九	芹の種類を	茅の種類を
三	三	渡を渡りて	河を渡りて	四九	三	Quercus	Quercus
三	七	鳴珠穆沁	鳥珠穆沁	四九	九	lign	lign
三	二	二十度なり	二十三度なり	五〇	五	Khochinl	Khochin
三	五	Hai ching	Hai ching	五一	五	阿哨爾沁	鳥珠穆沁
三	四	ion	chon	五二	四	鳴珠穆沁	ブンブリ
三	三	後十年也渤海左	後十年に渤海を	五三	三	ブンブリ	遼時代
三	五	古塔	古塔	五四	五	遼時代	徽章
三	四	彼の自家姓	コノ文取消す	五五	一〇	徽章	ポンポテ
三	六	國公龍	三個の石像は即	五六	四	ポンポテ	古土器
三	二	古器陶器	古陶器等	五七	二	古土器	ポンポテ
三	一	オルドル	オンドル	五八	六	ポンポテ	ブリヤート
三	八	土砂	砂土	五九	八	ブリヤート	住民も
三	五	人牛貝	八手貝	六〇	九	此に家	此家
三	八	濱水石橋を沈む	濱水石橋を望む	六一	三	マンハなる關係	マンハなる關係
三	九	宋大中旅符九年	宋大中祥符九年	六二	二	利德	德利
三	九	牛馬車	牛車				
三	八	チヤンガン	チヤンガン				
同	一	八七	同				
同	六	八九	同				
同	七	八八	同				
同	一	八七—三	契丹文字の碑文				
同	八	初めて雨に合ふ	初めて雨に會ふ				
三	七	十三オボ	十三オボ				
三	三	渡を渡りて	河を渡りて				
三	七	鳴珠穆沁	鳥珠穆沁				
三	二	二十度なり	二十三度なり				
三	五	Hai ching	Hai ching				
三	四	ion	chon				
三	三	後十年也渤海左	後十年に渤海を				
三	五	古塔	古塔				
三	四	彼の自家姓	コノ文取消す				
三	六	國公龍	三個の石像は即				
三	二	古器陶器	古陶器等				
三	一	オルドル	オンドル				
三	八	土砂	砂土				
三	五	人牛貝	八手貝				
三	八	濱水石橋を沈む	濱水石橋を望む				
三	九	宋大中旅符九年	宋大中祥符九年				
三	九	牛馬車	牛車				
三	八	チヤンガン	チヤンガン				
三	七	北東の理藩院	北京の理藩院				
三	七	Ougui t	Ouguiut				
三	六	蒙古葉	蒙古米				
三	五	メーリン	メーリン				

二五七	三	喀爾頷	喀爾喀頷	二五六	一〇
二五九	一〇	マイハンプース	マイハンプース	二五七	一四
二六四	五	此のの	此の	二五八	一三
同	四	是に至る迄	此處に至る迄	二五九	九
同	一三	ホブン	フブン	二六〇	一三
二七五	六	石猿	石鐵	同	一三
同	同	石猿	石鐵	二六一	一三
二七四—二七五	一〇—二	漢代前後	漢魏前後	二六二	一四
二七六	五	斉齊なる	斉齊なる	二六〇	八
二七八	二	蒙古古有	蒙古固有		
二八二	二	三浦里	三清里	二六三	六
二八六	七	庫倫にて	庫倫にて	同	七
二九一	一三	潮く	漸く		
	五	是れ外蒙古に於て	是れこの王府内に於て	二六四	八
二九五	九	『元朝秘史』	『元朝秘史』	二六五	一二
二九六	八	鳥貝	鳥貝	二六九	一三
二九九	一三	此十	此れ		
三〇〇	一〇	喀爾喀蒙古	察哈爾蒙古	二七〇	一四
三〇一	三	此々パラカ	此のパラカ	二七一	一〇
三〇三	五	滿洲アルバン	滿洲アムバン		
三〇四	三	ホブンタバ	フブンタバ	二七二	一三

二七六	一〇	一人のタイナ	一人のタイチ	二七七	一〇
二七七	三	蒙、吉語に	蒙古語に	二七八	一三
二七八	八	及ぼす	及ぼす	二七九	八
二七九	七	オボ	オボ	二八〇	七
二八〇	一	幅個かに	幅価かに	二八一	一
二八一	一	寫眞に撮影せる	コノ文字ヲ脱ス	二八二	一
		如き			
二八二	七	二清重	二清里	二八〇	九
二八〇	九	納得せしめ。	納得せしめ、	二八六	一三
二八六	一三	固有したりき	固有なる宗教存在なしたりき。	二八七	五
二八七	一	葡萄鏡	海獣葡萄鏡	二八三	一四
二八三	六	本鼓	太鼓		
二八五	二	バインタラ	バインタラ	二八四	一〇
二八九	六	ボルチカ	ボルチカ	二八五	一三
二八五	一〇	トーギヌアイワ	トーゲヌアイラ	二八六	一三
二八四	七	同	同	二八七	一〇
二八六	一〇	同	同	二八八	一〇
二八六	二	五六清重	五六清里	二八九	一三
二八七	一三	上にのみにして	上のみにして	二九〇	一〇
二八八	五	馬三馬	馬三疋	二九一	一三
二八四	一三	含む爲めなるが	含む爲めなるか	二九二	一四

二九五	一四	主として	主として	二九九	九
二九四	一	昔し	昔	三〇〇	一〇
二九八	一	ホンタル	ホンダル	三〇七	四
二九九	五	行宮は窈眞に示す如くなるが	此文ヲ脱ス	三〇八	六
三〇一	一	此のに	此の	同	九
三〇六	一三	此の附近は	此の附近は	三〇六	四
三〇七	一	必す龍王廟の	龍王廟の	三〇八	七
三〇八	一	自然の	自然に	三〇〇	一一
同	二	大幸を	御幸を	三〇四	一二
三〇五	五	此の地は	此の地は	三〇六	九
同	四	生えるたる	生えたる	同	一〇
三〇三	三	ブランヂー	ブランデー	三〇九	二
三〇四	七	各書體	各書體	三一	八
三〇八	一	門の永樂二十年	門は永樂二十年	同	三
四八五	五	漸く張家口の	張家口の	同	六
四八九	三	嵩	蕊	三一三	八
四九四	四	室内せり	案内せり	三一六	六
四九八	二	茶	茶入れ	三一六	四
三〇七	二	申込み	申込み	三一四	六
三〇〇	一	非なりかば	非なりしかば	三一五	一
三〇八	一	流城	流城	三一六	二

三〇九	九	同	此河は	三一二	一
三一〇	九	此河は	此河に	三一六	一〇
三一七	四	支那人の勢力	蒙古人の勢力	三一六	六
三一八	六	繩棚	繩一	三一九	六
同	九	ダライノール	ラダイノール	三二〇	一三
三一六	四	護衛の	讓衛の	三一三	二
三一六	七	漢河	漢河	三一六	六
三一七	一二	小破片	小破片	三一七	一〇
三一七	一二	碑文	碑文	三一七	二
三一六	九	而も	而も	三一六	四
三一六	一〇	此河を渡りて	此橋を渡りて	三一七	九
三一七	二	此河畔に	此橋畔に	三一八	一〇
三一八	九	取り	取る而して	三一九	二
三一九	六	昨日の車は早速	昨日の車は明夜	三二〇	八
三一三	五	暇を	を		
三一六	六	出發	發出	三一三	三
三一六	八	チヤガンウス	チヤカンウス	三一六	六
三一六	六	此處も亦	此處も赤	三一六	八
三一六	四	オボ	オド		
三一六	六	往來せる	往生せる	三一六	四
三一四	六	タプソトノール	タプソトノール	三一四	六
三一五	一	一軒もなし	ダブソイル軒もなし	三一五	一
				三一六	二

三一六	一〇	高き	高さ	三二〇	一〇
三一六	一〇	東都の遺跡	東胡の遺跡	三二六	一〇
三一六	六	タルハガ	タラハガ	三二六	六
三一九	六	交那人	支那人	三二九	六
三二〇	一三	ムシチ	ムンチ	三二〇	一三
三二三	二	老河河畔	老哈河々畔	三二三	二
三二六	六	ウルムラ	ウルムテ	三二六	六
三二七	一〇	此河の沿を	此河の沿岸を	三二七	一〇
三二七	二	之等よりて	之等によりて	三二七	二
三二六	四	押流されとする	押流されんとする	三二六	四
三二七	三	直ち	直ちに	三二七	三
三二八	九	主として	主として	三二八	九
三二〇	一〇	不在なりとて	不在なりとて	三二〇	一〇
三二三	四	土默特	土默特	三二三	四

一一四頁中の石碑に附せる『契丹の旅行券』は『契丹文字の碑文』の誤なり。
一三九頁碑文々字『西北』及び『東北』の周圍に引ける輪廓を脱す。

明治四十四年六月十二日印刷
明治四十四年六月十五日發行

（東京旅行奥付）

不許複製

定價金壹圓八拾錢

著者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　鳥居龍藏

發行者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　大橋新太郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　飯田三千太郎

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
（振替貯金口座東京二四〇番）

韓國統監子爵 寺內正毅閣下題字
謀總長伯爵 奥保鞏閣下序文
陸軍歩兵少佐 日野強君著

伊犂紀行

地圖 旅行線路圖其他 口繪 伊犂將軍新疆巡撫及笹雅其他 挿圖 伊犂地方人情風俗寫眞版數十葉

全二冊洋裝、菊判特製函入
正價 金貳圓六拾錢
小包料金拾六錢

萬朝報評 (前略)山あり、砂漠あり、奇病を見、狼群に遇ひ、或は乘馬病みて行く能はざる事あり、困難に克ち、缺乏に堪へつゝ各方面の觀察を遂げたる消息はこの上卷に依りて窺ふべく、更に概括せる、地勢、地理、風土、風俗、宗教、教育、產業、交通、行政等に至りては、下卷に俟ちて一目瞭然たるものあり、夫れ伊犂地方の地たるまた現下外交問題の一焦點たるなきにあらず、本書が此方面に於ける有數の資料たるはいふまでもなけれど地理上、人類學上、文明史上その他諸方面に於ても有力なる著作たるを失はず。

□博文館發行□

清國駐屯軍司令部編

北京誌

●卷頭＝北京城市街詳密圖 北京城內外風景風俗寫眞版四十七種挿入

全一冊洋裝菊判總クロース特製金文字入紙數九百廿頁
正價 金貳圓五拾錢
小包料金拾貳錢

我が隣邦大清國は政治外交貿易の關係上我が國民の研究を忘るべからざる所なり而して之れが首都たる北京の一事情を知悉するは清國の大勢に通ずるの捷徑たらんか本書は清國駐屯軍司令部の編纂に係り紙數千頁悉然たる一大卷なるも內容は眼部文學博士の監理の下に清國精通の大家の分擔執筆せられたる者なるを以て秩序整然條理明晰而かも調査精密に叙述周到北京上下內外の情況は此一書に於て盡せりと云ふも不可なし本書以前に本書なく本書以後亦た本書なしと斷言するを憚らず苟も政治經濟家は勿論東洋諸邦の研究に志ある士の必ず一本を備ふべき要あり

清國駐屯軍司令部編

天津誌

●卷頭＝天津城市街詳密地圖 天津城內外風景風俗寫眞版卅二葉挿入

全一冊洋裝菊判總クロース特製金文字入紙數六百八十二頁
正價 金貳圓五拾錢
小包料金拾貳錢

發行所 博文館

諸元勳題字並に序　農商務省商工局員　德永勳美君著

韓國總覽

●發行所　博文館

全一冊菊判上製總クロース金模樣押美本紙數千五百頁　正價金參圓卅錢　小包料金拾六錢

地圖五葉（大判石版彩色刷）寫眞版五十四頁（光澤紙刷）挿入

本書の內容は韓國に於ける總ての事項を網羅し各章を百八十八款百七十二項に分類し且つ所載事項は最新的確のを採り精査探討殆んど遺憾なからしめたり　殊に農工商一般經濟上に關する各項に對し最も重きを置きたる所以のもの朝鮮經營の要義は一つに經濟的發展に在るを以てなり　實業家經濟家は本書を以て朝鮮經營の羅針盤となさば便益を享くること多大なるべきを信ず

●最近印度事情　外務省通商局編　全一冊菊判上製紙數四百六十八頁　印度風景寫眞版八葉挿入　正價金壹圓卅錢　小包料金拾貳錢

概要綱目（○第一章＝商業○第二章＝農業○第三章＝工業○第四章＝鑛業○第五章＝運搬交通○第六章＝一般施設○第七章＝軍事○第八章＝教育の概況○第九章＝租税○第十章＝土人州

平岡樺太長官　國府犀東君
福本日南君　佐々木照山君　序　小川運平君著

滿洲及樺太

全一冊菊判三百二十二頁　清朝盛時代北滿洲外地圖一葉寫眞版二頁挿入　正價金九拾錢　郵税八錢

樺太名稱考を始め、從來の學說を排して、斬新卓拔の說を爲し、或は千古の疑を釋き、或は未發の秘を闡き、唐代の以後千餘年間和漢の史乘を涉獵して、滿洲の地理歷史の概念より說きて、大陸と樺太の關係に及び、唐より金元を經て明淸時代に到り、樺太に於ける日淸勢力の交會期に筆を擱く　玆に於て、無文の窮島をして、今日始めて光輝ある樺太島史を織成したる、著者の著目自ら一般史家と異るものあるを見て、本書の價値を知るべし、本書は滿洲樺太の經世家政治家軍人にも必要なり、滿洲樺太の在住民旅行家には缺くべからざる寶典なり、東洋學術の研究者地理歷史學者考古文學者にも必須の參考書なり、附錄したる黑龍江圖及明代北滿洲圖は讀書家の最も珍重する所なるべし。

●樺太及勘察加　松永聽劍君編　全一冊洋裝菊判　紙數三百六十頁　正價金五拾錢　郵税金八錢

（□博文館發行）

巖谷小波君著

新洋行土産

久保田米遷畫伯裝釘　（全二冊新形中版洋布金模樣紙函入）

正價各金壹圓卅錢　小包料各八錢　發行所　博文館

先に伯林二年の觀察を洋行土産二卷を現はして爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團に加はりて在米三月間の見聞を新洋行土産として發表す著者が銳利なる眼光と輕妙なる筆致とは世已に定評あり而して彼の實業團の渡米や亦我邦空前の壯なりとす本書が他の外遊記に比して其光彩を異にせるもの素より論を俟たざるべし

寫生旅行 魔宮殿見聞記

吉田博君著　（全一冊菊判上製四百廿頁　原色版二枚寫眞版十二枚入　正價金九拾錢　小包料八錢）

㊀魔宮殿の傳說は現代の讀書社會を驚かすべき南歐特殊の思想を代表せり

㊁魔宮殿の寫生畫は當代第一流の吉田畫伯の自ら提供せる逸品なり

田中渭人君著　（全一冊四六版總布上製七百三十二頁）

最新倫敦繁昌記

正價金壹圓　小包料八錢

大阪毎日新聞評　神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀念と輕妙酒脫の筆致を振つて倫敦の表裏兩面を縱橫無盡に活寫せる通信を續次して一卷となせるなり本書に於て最も取るべき處は悉皆によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せし如き觀あらしめたる處にあり倫敦案内記としては蓋し其優たるものゝ一ならん

文學博士　姉崎正治君著

花つみ日記

全一冊洋裝四六判裝釘函入　コロタイプ及寫眞版卅二枚入　定價金壹圓卅錢　小包料金八錢

南イタリヤの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、その中には湖畔の佛蹟會に異國の友を會して、佛教を論り、ロマの寺院に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の変化に接したる跡を傳ふ。天然美術の記錄宗教等の評論として江湖の一讀を求む。

——（三版）——

坪谷善四郎君著　（全一冊四六判特製紙函入）

世界漫遊案内（再版）

正價金壹圓七拾錢　小包料金拾貳錢

業に著者自ら歐米を漫遊し、多くの洋行者が行くべき處は勿論、脚達者に駈け廻つて、筆達者に書き記し、一箇年かゝつて出來たのが即ち本書だ、見もすれば無趣味に流れ易き案内記を、實際經驗の事實で潤色して、百餘種の寫眞を挿み親切の案内記に正確の記事、見て面白く、讀んで裨益多い、今後の洋行者には恰好の案内記で、前日の洋行者には懷想の好伴侶である。

鎌田榮吉君著

歐米漫遊雜記（九版）

全一冊四六判四百二十四頁　正價金四拾錢　郵稅六錢

發行所　博文館

エ7T53

青柳篤恒君　中山東一郎君共編

清國漫遊案內

●附錄＝長江沿岸略圖、渤海沿岸略圖、江南大運河附近水路圖

本書は目下日清兩國彼我交通の頻繁に伴ひ渡清者の一小伴侶たらしめんとの目的を以て編者は清國內地に於て得たる見聞と各國種々の地理書在清帝國領事館の報告及兩國各地汽車汽船諸會社營業案內等精確なる材料を蒐集參酌して編纂したる者なれば渡清者は勿論苟も東洋の商業的競爭に志を有する者は本書を携帶精査すべきの要あり

（全一冊四六判洋布上製）
正價金七拾五錢
郵稅金六錢

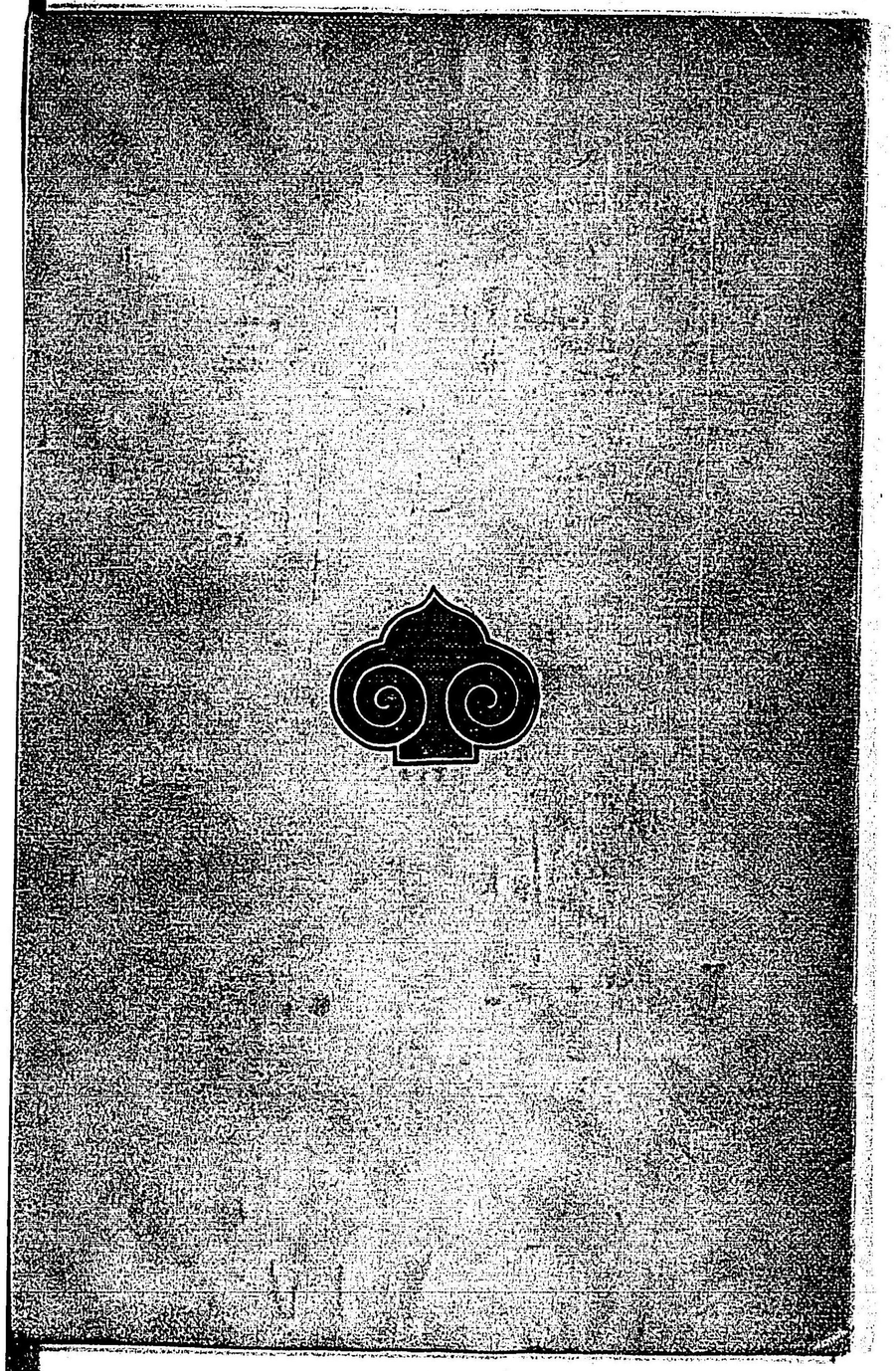
發行所　博文

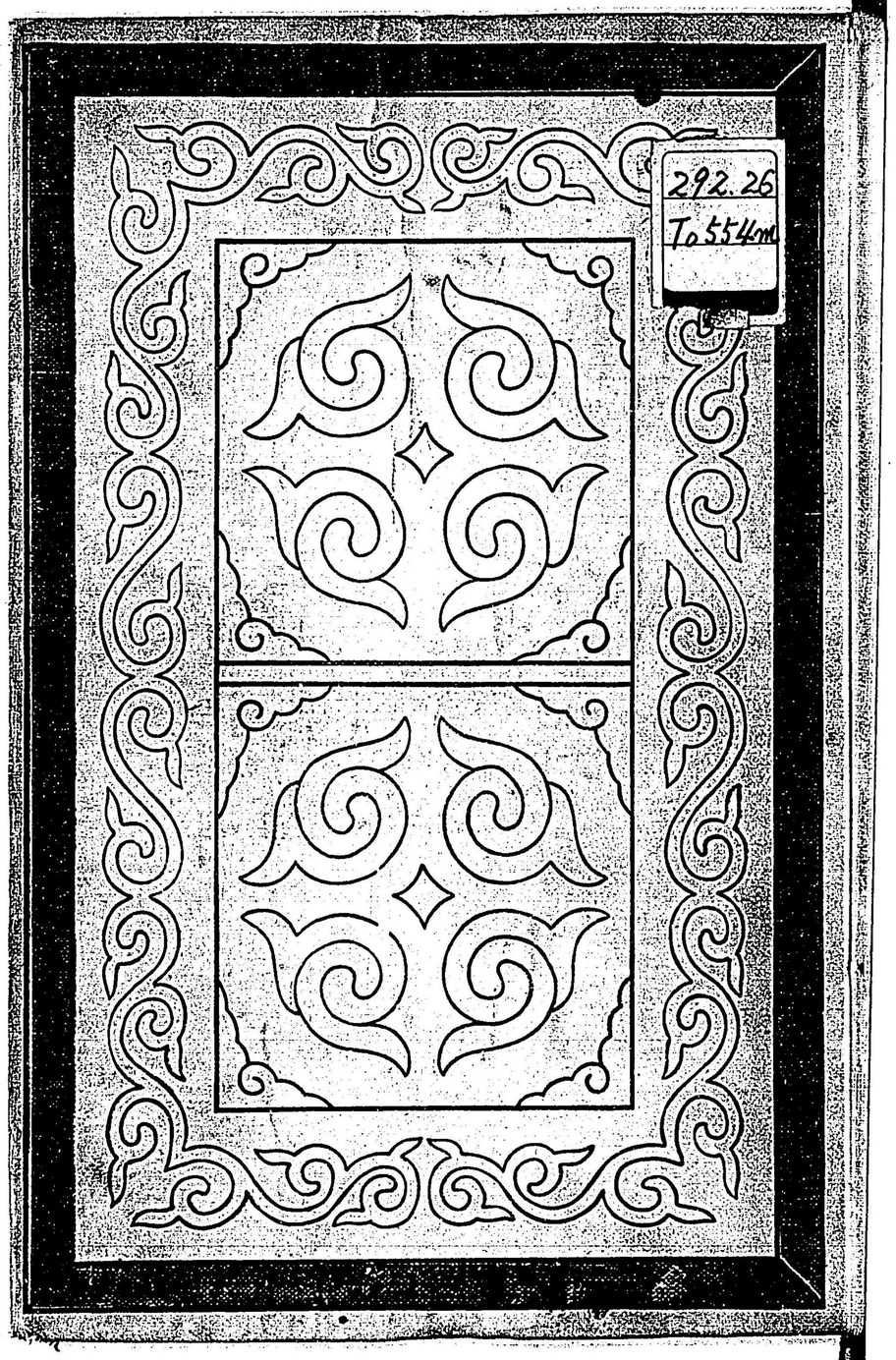
香川悅次君著
●支那旅行案內（全一冊三六判五百九十二頁）正價金四拾錢 郵稅金六錢

奧田竹松君著
●北清の商業（全一冊菊判二百二十頁）正價金四拾錢 郵稅金六錢

中央新聞記者　岡田雄一郎君著
●滿洲起業案內（全一冊四六判二百五十頁）正價金參拾錢 郵稅金四錢

步兵大尉　平山久治君著
●滿韓土語案內（全一冊袖珍變本）正價金貳拾錢 郵稅金貳錢
袖珍資用





292.26
To554m

026704-000-4

'292.26-To554m

豪古旅行

鳥居　龍蔵／著

M44

ADD-0400

斗7T53

蒙古行に就て最も關係深き

服部文學博士

同　令夫人

に謹て本書を獻る